

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

共生デザインの試み：熊本県立美術館コン テナポラリー棟

下重, 祥崇 / SHIMOJYU, Yoshitaka

(発行年 / Year)

2008-03-24

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2008-03-24

(学位名 / Degree Name)

修士(工学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

P377.5
M35-2
2007-26

2007年度 修士論文
Master's Thesis Academic Year 2007

共生デザインの試み 熊本県立美術館コンテンポラリー棟

指導教官/主査 大江 新 教授
Academic Advisor Prof. Shin Ohe

副査 富永 譲 教授
副査 渡邊 真理 教授

法政大学大学院 工学研究科 建設工学専攻 大江研究室 下重 祥崇

Background and purpose

Today when 60 years passed as for "Sengo", After the war, the demolition number of cases of the modernism construction increases rapidly in Japan. Construction that supports the high economic growth in postwar days starts shutting the life as a sacrifice of superannuation and new completion of alternative facilities and the development of the developer. Coming at time when it thinks about "Preservation, repair, and extension" of the modernism after the war is a common knowledge. The article that publishes the current state and preservation and the repair of the modernism construction after the war has increased in an architectural magazine and an architectural technical book. Hiroyuki architectural historian Suzuki is touching succession using it with some cases in book "Modern architectural preservation theory". The usage change is done, and the case that keeps being used as before is few though preservation and the repair activity are actively done than before, and the building of prewar days is left as a symbol in the region. It is not easy to think it is effective to the modernism that explains the relation between the space and the function as such a preservation activity hangs out functionalism. Up to now, a positive extension plan seems not to have been held in Japan for the extension and the repair. The extension was abandoned in the central area of Tokyo for reasons of presence and the building law of land in the extension part when functional trouble was caused in a certain facilities and new facilities were constructed. It is a demolition and is not mere preservation in this research in 21 century in the future, and the design of the old and new construction symbiosis to keep using the extension of the modernism after the war of will the request will be researched and a new proposal be done.

Research method and research policy

The symbiosis design that is the purpose of this research to keep using it is neither the one only to supplement an only existing function nor harmony. It is the one to indicate "Symbiosis" of a new extension part and existing construction. Might the one that "Symbiosis" is the one never to mix, to rise above the times, and to do the coexistence concomitance, and is the relation that conflicts according to time. However, they esteem each other, and the improved each other synergy effect is requested. The following are made to be done with the extension plan in this research done for that.

A. Preservation

Plan to esteem architectural value of existing part (space, composition, and lead plan, etc. by designer's thought)

B. Repair

Groping for creation of new place using existing space by improvement and extension part of functionality of existing part

C. Extension

Existing and the extension improve of each by the extension idea that considers the above-mentioned three points each other, and construction that can enjoy richness is created.

A concrete site will be first decided construction for that. After the war, the modernism is led in this research over many years, and Kumamoto Prefectural Museum of Art (1977) that is the masterpiece of the museum work of the latter term of Kunio Maekawa discussed by preservation and the demolition will be taken up and the extension plan of the contemporary building is held also in some buildings now.

Contents

chapter 1 序論	-2
01 背景と目的	-2
02 研究方法・研究方針	-3
chapter 2 事例分析と美術館の変容	
01 事例分析(美術館)	-4
chapter 3 前川國男研究・分析	-16
01 神奈川県立図書館・音楽堂	-18
02 林原美術館	-19
03 ケルン市立東洋美術館	-20
04 埼玉県立博物館	-21
chapter4 設計	-22
chapter5 参考文献・謝辞	

chapter 1 序論

01 背景と目的

「セング」も 60 年経った今日、日本では戦後モダニズム建築の取り壊し件数が急増している。戦後の高度経済成長を支えた建築は、老朽化や新たな代替施設の完成やデベロッパーの開発の犠牲としてその生涯を閉じようとしている。

戦後モダニズムの「保存・改修・増築」についても考える時期に来ていることは周知の事実である。

建築雑誌、建築専門書では戦後モダニズム建築の現状や保存・改修について掲載する記事が増えている。建築史家鈴木博之氏は著書「現代の建築保存論」のなかで幾つかの事例とともに使いながら継承することに触れている。

戦前の建築物は保存・改修活動も以前より盛んに行われ、その地域のシンボルとして残されるケースが多いが、用途変更が行われ、以前のように使い続けられているケースは少ない。このような保存活動が機能主義を掲げて空間と機能の関係を説いたモダニズムに有効であるとは考えにくい。

増築・改修に関してはこれまで積極的な増築計画が日本で行われていないように思われる。ある施設において機能的不具合が生じた場合、都心部では増築部の土地の有無や、建築法規上の理由で増築を断念し新たな施設の建設が行われたケースが多い。

本研究ではこれからの 21 世紀、取り壊しでも単なる保存でもなく求められるであろう戦後モダニズムの増築について使い続けるための新旧建築共生のデザインを研究し新たな提案を行うことにする。

02 研究方法・研究方針

本研究の目的である使い続けるための共生デザインとはただ単に既存の機能を補うためだけのものでも調和というものでもない。

新たな増築部と既存建築との「共生」を指すものである。「共生」とは決して混ざり合うわけではなく、時代を超越して混在併存するものであり、時によっては相反する関係であるものかもしれない。しかしながらそれらはお互いを尊重し、高め合う相乗効果が求められる。そのために行う本研究においての増築計画とは、以下のことをさす。

A、 保存

既存部の建築的価値（設計者の思想による空間・構成・導線計画など）を尊重した計画

B、 改修

既存部の機能性の向上と増築部による既存空間を利用した新たな場の創出の模索

C、 増築

既存部にある機能ストックを利用した新たな建築の提案

以上の3点を考慮した増築案により、既存・増築がそれぞれを高め合い、豊かさを享受できる建築を創造する。

まずそのために具体的な敷地と建築を決定することにする。

本研究では戦後モダニズムを長年にわたりリードし現在幾つかの建物でも保存と取り壊しで議論されている前川國男の後期美術館作品の傑作である熊本県立美術館(1977)をとりあげることにしてコンテンポラリー棟の増築計画を行う。

chapter 2 事例分析

現在ヨーロッパでは宮殿や駅、邸宅を用途変更により美術館に変えている事例が数多くある。

パリでは、ルーブル、オルセー、ピカソ美術館などがあり、イギリスの火力発電所を改築したテイトモダンやその周辺環境との関係から高い評価を受けているコペンハーゲンのルイジアナ美術館もその1つである。多くの国を代表する美術館がこのように既存の建物を有効に使用して成り立っている。

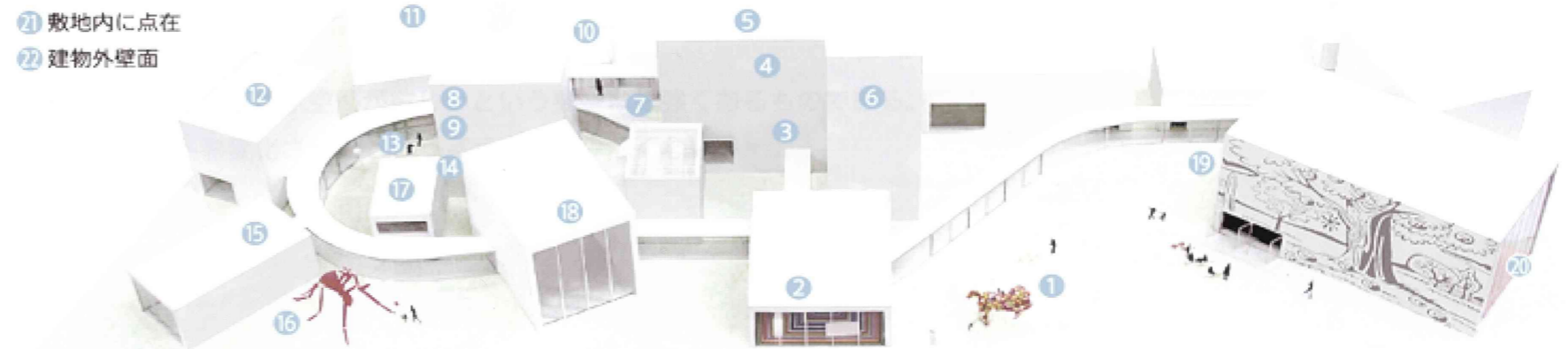
又、モダニズム建築においても用途変更の事例が幾つかある。国内においても磯崎新の旧大分県立図書館、現アートプラザもそのひとつである。

美術館においてはこのような用途変更によるものだけではなく、増築という形で現在も使用されているものがある。世界的に有名なものではニューヨークのMoMAがあげられる。その他にもアムステルダムゴッホ美術館などがある

国内では上野の国立西洋美術館においてル・コルビュジェ設計の本館と前川國男設計の増築部という事例や東京国立近代美術館において谷口吉郎設計の既存に対して坂倉事務所が増築改修が行われている。

今後21世紀においてモダニズム建築、特に収蔵や蔵書が日々増加する図書館・美術館においては増築・改修が増加すると思われる。

十和田市立現代美術館



21世紀を迎えた現在美術空間は変化しつつある。

いままでの箱のなかの美術館から現代アートなどは自分の居場所を求めて抜け出そうとする動きがある。

現代アートにとっては何気ない日常や多くのひとが行き交う交差点でさえ展示空間になる可能性があるということである。

このことが美術館の設計にも大きく影響をしているといえる。

近年、現代美術館は決まった導線が消えてきている。美術館のギャラリー化が起こっているともいえる。最近の美術館に関するコンペディションにおいてもその傾向をみることができる。2005年に行われ、現在工事中である十和田市野外芸術文化ゾーンアートセンタープロポーザルにおいては最優秀案の西沢立衛案では展示室の切り替えに言及しており、乾久美子案、藤本壮介案では来館者が自由に移動できる流動的な空間のプランとなっている。このことにより、人とアートの関係性と同時にアートとアートの関係性やアートの見方の変化をみてとることができる。

また、近年の傾向としては滞在型美術館としてライブラリー、レストラン、ワークショップスペースなどの充実が多くなってきている。

最近では青森県立美術館や横須賀美術館においても同様のことがいえる。

- | | | |
|----|-----------------|---------------------|
| 1 | チェ・ジョンファ | Jeonghwa Choi |
| 2 | ジム・ランビー | Jim Lambie |
| 3 | ロン・ミュエク | Ron Mueck |
| 4 | マリール・ノイデッカー | Mariele Neudecker |
| 5 | フェデリコ・エレロ | Federico Herrero |
| 6 | フェデリコ・エレロ | Federico Herrero |
| 7 | 山本 修路 | Shuji Yamamoto |
| 8 | ボッレ・セートレ | Borre Saethre |
| 9 | キム・チャンギョム | Changkyum Kim |
| 10 | ジェニファー・スタインキャンプ | Jennifer Steinkamp |
| 11 | ハンス・オブ・デ・ビーク | Hans Op de Beeck |
| 12 | トマス・サラセーノ | Tomas Saraceno |
| 13 | オノ・ヨーコ | Yoko Ono |
| 14 | 森北 伸 | Shin Morikita |
| 15 | アナ・ラウラ・アラエズ | Ana Laura Alaez |
| 16 | 椿 昇 | Noboru Tsubaki |
| 17 | 栗林 隆 | Takashi Kuribayashi |
| 18 | スウ・ドーホー | Do-Ho Suh |
| 19 | ポール・モリソン | Paul Morrison |
| 20 | マイケル・リン | Michael Lin |
| 21 | 山極 満博 | Mitsuhiro Yamagiwa |
| 22 | 高橋 匡太 | Kyota Takahashi |

十和田市立現代美術館 HP

<http://www.artstowada.com/jp/artworks.html> より

建築の中にアートが入るのではなくアートで建築が決まる。

展示空間の動向

近年展示空間の変容は著しく、多様な空間が存在する。建築資料集成を参考に上げてみると

1、フレキシブルな空間

どんな展示物に対しても自由にレイアウトでき、フレキシブルに対応できる展示空間が欲しいという要望は根強くあるものである。

展示会によってコンピューター制御の可動展示パネルによってレイアウトを変化させるという展示空間も少なくない。

2、ホワイトキューブ

展示作品を阻害するような余計な装飾・色を排除した空間。

今後は自然光をどう取り入れるかがポイントとなると考えられる。

3、ワークショップ的空間

一方ホワイトキューブへの批判もある。周囲と縁を切った白い空間内でしか存在しえない作品とはいったい何なのか。アートが存在する場が展示空間なのではないだろうかという考えもある。現在現地にアーティストを招き、ワークショップを通して作品を完成させていくという事例も増えている。

4、固有な空間

展示物のための固有な空間としては展示物と空間が1対1で対応している空間といってよい。コレクションとして展示にあるまとまりがあること常設の展示空間としてなりたつことが固有な空間を作るうえでの条件となる。

5、場所に根ざした空間

歴史・風土をテーマとする展示の場合ジオラマ的手法による再現または復元展示が主流であったが近年もっと本格的な展示が求められてきている。

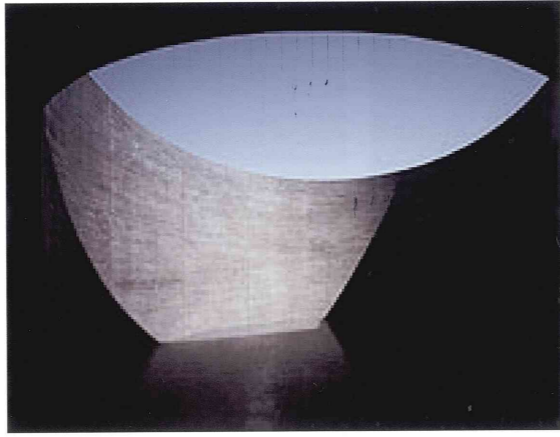
6、再生された空間

都市財産として建築物を長く存続させることはまちづくりのうえで非常に大事なことである。長く人々に利用されてきた建物には代え難い思いと記憶が込められている。人々の思いが込められた建築物を存続することは都市の大きな財産となる。

7、仮設的空間

期間限定の展示空間。インスタレーションは期間限定であると同時になおさら強く場所性に訴えてくる。

近年の美術館事例

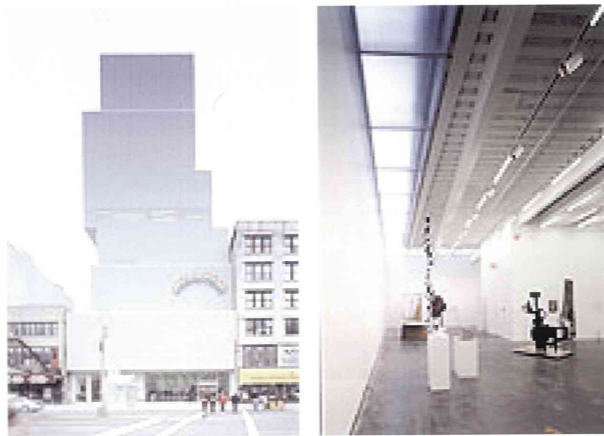


『新建築』 2008年02月号 作品

- 作品名 佐川美術館 樂吉左衛門館 / SAGAWA ART MUSEUM RAKU KICHIZAEMON-KAN
- 主要用途 美術館
- 所在地 滋賀県守山市水保町北川 2891
- 設計 樂吉左衛門+竹中工務店
- architects: RAKU KICHIZAEMON TAKENAKA CORPORATION
- 施工 竹中工務店

4、 固有な空間

佐川美術館の中で樂吉左衛門を中心に展示してある美術館。
水の下に展示空間があったり、茶室があるなど固有な空間の美術館

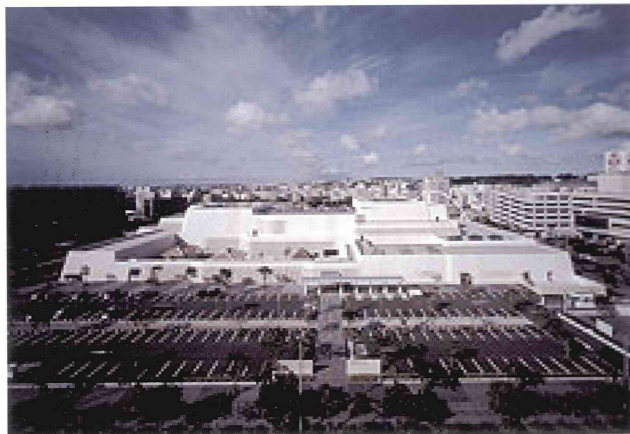


『新建築』 2008年01月号 作品

- 作品名 ニューミュージアム / NEW MUSEUM OF CONTEMPORARY ART
- 主要用途 美術館
- 所在地 235 BOWERY, NEW YORK, NY, USA
- 設計 妹島和世+西沢立衛 / SANAA
- architects: KAZUYO SEJIMA + RYUE NISHIZAWA / SANAA
- 施工 F. J. SCIAME CONSTRUCTION

2、 ホワイトキューブ

ホワイトキューブと今日現代アートが展示されている倉庫のような空間とが混ざったような美術館。
搬入動線が来館者と同じという特徴がある。

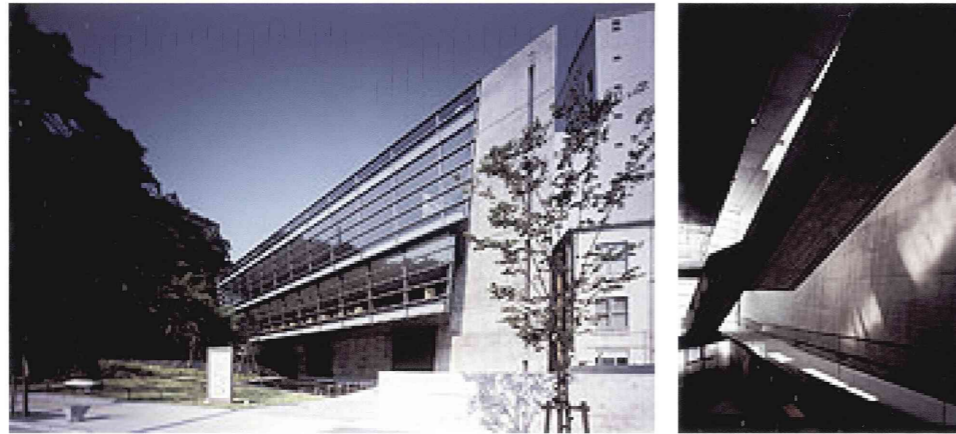


『新建築』 2007年11月号 作品

- 作品名 沖縄県立博物館・美術館
- 主要用途 博物館 美術館
- 所在地 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1
- 設計 石本建築事務所・二基建築設計室設計共同企業体
- 施工 上門工業・大協建設・町田組 (1工区)
大米建設・東江建設・富士建 (2工区)
金秀建設・沖創建設・野原建 (3工区)

5、 場所に根ざした空間

博物館と美術館の一体施設。
沖縄の風土を考慮した設計となっている。



『新建築』 2007年09月号 作品

- 作品名 坂の上の雲ミュージアム
- 主要用途 博物館
- 所在地 愛媛県松山市一番町 3-20
- 設計 安藤忠雄建築研究所
- 施工 竹中工務店四国支店

1、フレキシブルな空間

三角の形を利用して階段やスロープで上昇していく美術館三角の中心が展示空間となっている。



『新建築』 2007年7月号 作品

- 作品名 横須賀美術館
- 所在地 神奈川県横須賀市鴨居 4-1
県立観音崎公園内
- 主要用途 美術館
- 設計 山本理顕設計工場
- 施工 鹿島建設

1、フレキシブルな空間

設計者をあらかじめ決定してから依頼主と話しを進めて設計を行う形で進められた美術館海からの塩害をふせぐため鉄骨鉄板はガラスで覆われている。



『新建築』 2007年7月号 作品

- 作品名 ねむの木こども美術館
- 所在地 静岡県掛川市上垂木ねむの木学園内
- 主要用途 美術館
- 基本設計 藤森照信 + 内田祥士 (習作舎)
- 実施設計・監理 習作舎
- 施工 石川建設

5、場所に根ざした空間

藤森氏の設計により材料に細かな個性がみられる美術館。

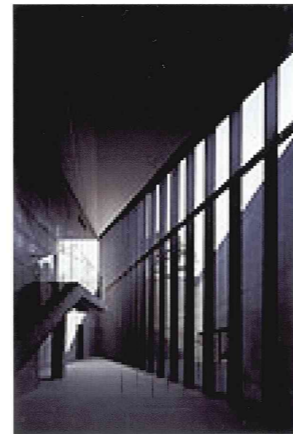
造形的な外観と独特な内部空間が特徴。



『新建築』 2007年7月号 作品

- 作品名 KEYFOREST871228 キース・ヘリング美術館
- 所在地 山梨県北杜市小淵沢町10249-1, 7
- 主要用途 美術館(キース・ヘリング美術館) リラクゼーションプール・温浴施設(リラプール・クロテル)

4、 固有な空間
キース・ヘリングの作品の美術館。
闇のスロープなどここにしかない空間が広がる。
狭くなったり、ひろがったりと楽しい空間の美術館自体がキース・ヘリングを意識して作られている。



『新建築』 2007年05月号 作品

- 作品名 21_21 DESIGN SIGHT
- 所在地 東京都港区赤坂9-7-6 東京ミッドタウン内
- 主要用途 デザイン文化交流施設 店舗
- 設計 安藤忠雄建築研究所+日建設計
- 施工

1、 フレキシブルな空間
ミッドタウンと同時に計画が進行していった美術館地下に展示室をもってきて屋根には一枚の鉄板が覆う。



『新建築』 2007年05月号 作品

- 作品名 ノマディック美術館
- 所在地 東京都江東区青海1
- 主要用途 美術館
- 設計 坂茂建築設計
- 施工 TSP 太陽

7、 仮設的空間
期間限定の美術館。
コンテナを積んだ空間はアメリカで展示を終えて解体され日本でまた組み立てられた。

これからの日本国内の美術館傾向として以下に独立行政法人評価委員会 独立行政法人国立美術館の中期目標-文部科学省 2006年12月14日と10+1(INAX出版)2004 No.35[OMA「ホイットニー美術館」増築案 政治と芸術の境界線]美術館の変容とexperienceを添付する。

<p>(序文) 独立行政法人通則法(平成十一年法律第百三号)第二十九条の規定により、独立行政法人国立美術館が達成すべき業務運営に関する目標(以下「中期目標」という。)を定める。</p> <p>(前文) 独立行政法人国立美術館(以下「国立美術館」という。)は、我が国における芸術文化の創造と発展、国民の美的感性の育成を使命とし、美術振興の中心的拠点として、美術に関する作品等を広く国民に紹介するとともに、美術創造活動の活性化を推進し、文化の向上・発展のため、多彩な活動を展開すること、我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションを形成し、後世に文化を継承していくこと、我が国の「顔」として海外の主要な国立美術館、作家等と連携し、美術を通じた国際文化交流を推進すること、調査研究の成果及び国立美術館が有する所蔵作品や人材を活用し、我が国の美術館のナショナルセンターとして、美術館活動全体の充実が期待されている。我が国の文化振興において不可欠なそれらの活動の活性化、基盤の整備は国立美術館が課せられた基本的使命である。</p> <p>このため、所蔵作品の一層の充実や施設設備の整備充実をはじめとする収集・保管・展示機能及び調査・研究機能の向上を図るとともに、全国的な活動を行っている美術団体等への展覧会会場の提供、人材養成・研修、国際交流や文化発信の拠点としての機能を一層充実していく必要がある。</p> <p>各館の役割・任務は以下のとおりとする。</p> <p>(東京国立近代美術館) 近・現代美術に関する作品その他の資料を収集・保管し、鑑賞機会を提供し、あわせてこれに関連する調査研究及び事業を行う。本館のほか、工芸館、フィルムセンターを運営する。フィルムセンターは、我が国における映画文化振興の中核となる映画に関する総合的な保存・上映・研究機関を目指す。</p> <p>(京都国立近代美術館) 近・現代美術に関する作品その他の資料を収集し、保管して鑑賞機会を提供し、あわせてこれに関連する調査研究及び事業を行う。</p> <p>(国立西洋美術館) 昭和30年10月8日に日本国政府及びフランス政府間に成立した合意に基づきフランス政府から日本国政府に寄贈された美術に関する作品(松方コレクション)並びに西洋美術に関する作品及び資料を収集し、保管して鑑賞機会を提供し、あわせてこれらに関連する調査研究及び事業を行う。</p> <p>(国立国際美術館) 日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために必要な美術に関する作品その他の資料を収集し、保管して鑑賞機会を提供し、あわせてこれに関連する調査研究及び事業を行う。</p>	<p>このような役割を果たすため、国立美術館の中期目標は次の通りとする。</p> <p>中期目標の期間 国立美術館が実施する業務は、計画、準備から成果を得るまでには長期間を要するものが多いため、中期目標の期間は、平成18年4月1日から平成23年3月31日までの5年間とする。</p> <p>国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項</p> <p>1 美術振興の中心的拠点として、多様な鑑賞機会の提供、美術創造活動の活性化の推進など、現代の美術を取り巻く状況の変化に対応した多彩な活動を展開し、我が国の美術振興に寄与</p> <p>国立美術館は、我が国の美術振興の中心的拠点として、現代の美術を取り巻く状況の変化に対応した多彩な活動を展開していくことが求められている。このため、展覧会等を通じた多様な鑑賞機会の提供、美術創造活動の活性化の推進などに積極的に取り組むこととする。</p> <p>(1) 多様な鑑賞機会の提供</p> <p>国立美術館は、美術振興の中心的拠点として、学術的意義、国民の関心、国際文化交流の推進等に配慮しつつ、多様で秀逸な美術作品の鑑賞機会をより多くの国民に提供すること。</p> <p>また、展覧会は、次の観点から実施するものとし、中期目標期間全体としてバランスのとれたものとなるようにすること。</p> <p>(イ) 国家的規模で行う主導的な展覧会の実施</p> <p>(ロ) 全国の美術館に方向性を示す先導的な展覧会の実施</p> <p>(ハ) 新しい芸術表現を取り入れた先端的な展覧会の実施</p> <p>展覧会を開催する際は、企画段階から開催目的、期待する成果、学術的意義等を明確にするとともに、専門家からの意見や入館者の満足度を踏まえた事業評価を行い、それ以降の展覧会の充実に反映させる。</p> <p>地方における鑑賞機会の確保のため、受け入れ側の要望を十分踏まえつつ、地方巡回展を積極的に行うこと。</p> <p>個々の展覧会においては、実施目的、内容、良好な観覧環境の確保、過去の入館者数の状況等を踏まえた適切な入館者数の目標を設定し、その達成に努めること。</p> <p>フィルムセンターにおいては、映画フィルム等の所蔵作品の活用を図った上映展示機能の充実を図ること。</p>	<p>(2) 美術創造活動の活性化の推進</p> <p>国立新美術館は、全国的な活動を行っている美術団体等に展覧会会場の提供を行うとともに、新しい美術の動向を紹介することなどを通じて、美術に関する新たな創造活動の展開やアーティストの育成等を支援し、我が国の美術創造活動の活性化を推進すること。</p> <p>また、メディアアート、アニメ、建築など世界から注目される新しい芸術表現の国内外に向けた拠点的な役割を果たすことを目指し、その取組みを積極的に進めること。</p> <p>(3) 美術に関する情報の拠点としての機能の向上</p> <p>国民の美術に関する理解促進に寄与するため、国立美術館に関する情報公開を進めるとともに、国内外の美術に関する情報を収集・提供し、美術に関する情報拠点としての機能を高めることとする。</p> <p>ICT(情報通信技術)を活用した積極的な情報発信やホームページの充実を行い、ホームページのアクセス件数の目標を設定し、その達成に努めること。</p> <p>国内外の美術に関する情報の収集、記録の作成・蓄積及びデジタル化を進めるとともに、レファレンス機能を充実させること。</p> <p>(4) 国民の美的感性の育成</p> <p>美術作品や作家についての理解を深め、鑑賞者の美的感性の育成に資するよう、国立美術館における美術教育に関する調査研究の成果を踏まえ、ギャラリートーク、ワークショップ等に取り組むこととする。</p> <p>学校や社会教育施設等との連携により、子どもから高齢者までを対象とした幅広い学習機会を提供すること。</p> <p>ボランティアや支援団体を育成し、相互の協力により美術館における教育普及事業の充実を図ること。</p> <p>フィルムセンターにおいては、映画フィルム等の所蔵作品の活用を図った教育普及機能の充実を図ること。</p> <p>(5) 調査研究成果の反映</p> <p>展示、教育普及活動その他の美術館活動を行うために必要な調査研究を計画的に行い、その成果を国立美術館の業務の充実、文化の振興に反映させること。</p> <p>(6) 快適な観覧環境の提供</p> <p>国民に親しまれる美術館を目指し、入館者の立場に立った観覧環境の整備や利用</p>
--	---	---

共生デザインの試み 熊本県立美術館コンテンポラリー棟

<p>者の要望を踏まえた管理運営を行い、入館者の期待に応えること。 高齢者、身体障害者、外国人等を含めた入館者本位の快適な観覧環境を形成すること。 入場料金及び開館時間の弾力化など、利用者の要望や利用形態等を踏まえた管理運営を行うこと。 ミュージアムショップやレストラン等のサービスの充実を図ること。</p>	<p>国立美術館が有する調査研究の成果、所蔵作品、人材等を活用し、我が国の美術振興のナショナルセンターとして、公私立美術館を含めた美術館全体の活動の活性化に寄与することとする。</p>	<p>財務内容の改善に関する事項</p> <p>税制措置も活用した寄付金や自己収入の確保、予算の効率的な執行等に努め、適切な財務内容の実現を図ること。</p>
<p>(7) 国立新美術館の開館</p> <p>我が国の美術創造活動の活性化を推進するため、平成19年1月の開館に向けて、我が国の5番目の国立の美術館である「国立新美術館」の開館準備を進めること。</p>	<p>(1) 所蔵作品等に関する調査研究の成果を多様な方法により積極的に公表し、広く公私立美術館関係者の知見の向上に資すること。 (2) 国内外の美術館関係者との研究会の開催や研究者の交流等を行い、国際的な美術館の拠点となることを目指すこと。 (3) 国内外の美術館等における修理・保存処理の充実に寄与すること。</p>	<p>1 自己収入の増加</p> <p>積極的に外部資金、施設使用料等、自己収入の増加に努めること。 また、自己収入額の取り扱いにおいては、各事業年度に計画的な収支計画を作成し、当該収支計画による運営に努めること。</p>
<p>2 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成・継承</p>	<p>(4) 国内の公私立美術館への所蔵作品の貸与については、所蔵作品の展示計画、作品保存に十分配慮しつつ、可能な限り積極的に取り組むこと。 (5) 小・中学生のための美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして、モデル的な教材の開発や教員、学芸員等の資質向上のための研修等に重点化して実施すること。</p>	<p>2 固定的経費の節減</p>
<p>国立美術館は、我が国唯一の国立の美術館として、我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションを形成し、海外の主要な美術館と交流するとともに、これらの貴重な国民的財産を後世に伝え、継承していくことが必要である。このため、国立美術館は、適宜適切な収集を進めるとともに、作品の保管環境の充実に努めることとする。</p>	<p>(6) 大学等との機関とも積極的に提携しながら、今後の美術館活動を担う中核的な人材の育成を図ること。 (7) 全国の美術館等の運営に対する援助、助言を行うとともに、関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努めること。</p>	<p>管理業務の節減を行うとともに、効率的な施設運営を行うこと等により、固定的経費の節減を図ること。</p> <p>その他業務運営に関する重要事項</p>
<p>(1) 各館は、美術作品の動向に関する情報収集能力と収集の機動性を高めるとともに、それぞれの役割・任務に沿って収集方針を定め、これに基づき、計画的かつ適時適切な購入と寄贈・寄託の受入れを進め、体系的・通史的にバランスのとれた所蔵作品の充実を図ること。</p>	<p>(8) フィルムセンターにおいては、国際的に我が国を代表する映画文化振興の中核となる総合的な機関として、国内外の映画関係団体等との連絡を密接に図り、その連携・調整について役割を果たすこと。また、より機動的かつ柔軟な運営を行うため、本東京国立近代美術館から独立した一館となることを検討すること。</p>	<p>1 人事管理(人件費、意識改革等)、人事交流の適切な実施により、内部管理事務の改善を図ること。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用すること。</p> <p>2 業務の目的・内容に適切に対応するため長期的視野に立った施設・設備の整備計画を作成すること。</p>
<p>(2) 収蔵庫等保存施設の狭隘・老朽化への対応を図り、所蔵作品全体を適切な保存と管理環境下に置き、それらを適切に後世へ継承すること。</p> <p>(3) 各館の連携を図りつつ、所蔵作品についての修理、修復の計画的実施により適切な保存を行い、適切に後世へ継承すること。</p> <p>(4) 収集・保管・修理等を行うために必要な調査研究を計画的に行い、その成果を国立美術館の業務の充実、文化の振興に反映させること。</p>	<p>業務運営の効率化に関する事項</p> <p>運営費交付金を充当して行う業務については、事務手続きの簡素化や、競争入札等の推進により一層の業務の効率化を進め、中期目標の期間中、一般管理費15パーセント以上、業務経費5パーセント以上の業務の効率化を図ること。ただし、退職手当、特殊要因経費はその対象としない。</p> <p>また、「行政改革の重要方針」(平成17年12月24日閣議決定)を踏まえ、平成18年度から5年間において、国家公務員に準じた人件費削減の取組を行うとともに、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを進めること。</p>	
<p>3 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与</p>		

以下に 10+1 (INAX 出版) 2004 No.35 の記事を添付する。

[OMA 「ホイットニー美術館」増築案 政治と芸術の境界線]

美術館の変容と experience

美術館はそもそも絵画や彫刻などの収蔵品を永久保存して貯めてゆく性格のものだった。しかし伝統的なアートのカテゴリーは、時代とともにアースワーク、インスタレーション、メディアアートなどへと領域を拡大し、今では漫画やアニメまでが美術館での展覧会の対象となっている。こうなると美術館で展示されたものがアート＝高尚であるという制度もかなり怪しい。たとえば OMA の設計したロッテルダムのクンストハルなどは企画展示のみの施設であり、そこに収蔵機能はない。これはアートというくくりの中での場所貸し施設であり、アートの解釈を広げることで実にさまざまな展示やパフォーマンスがおこなわれている。また、ヘルツォーグ & デ・ムーロンのシャウラガー美術館は、美術館を収蔵機能に特化した倉庫として取り扱い、研究者や鑑賞者は倉庫の中をさまよい歩くというコンセプトで作られている。いずれのケースも、美術館の格式や崇高さはどんどん格下げされ、建築的にはショッピングセンターや倉庫と大差なくなるうとしているのだ。拡大解釈されたアートは既存の美術館には収まりきれないし、建物のあり方もそこに向かう観衆も以前とは全く質の違うものになってきている。平たくいえばそれはアートの大衆化なのかもしれない。時代の波に乗るコールハースは、まさにこの拡大された美術館の領域を新しいコンセプトで再定義しようとする。そこに experience という概念がもちこまれた。ホイットニー美術館増築計画 = NEWHITNEY で OMA は、昔ながらの収蔵品の展示 = exhibition は既存の建物にお任せして、増築部分でこれまでのアート領域からはみ出た部分を experience として担う提案をしている。experience はさらに、移動空間までが芸術的にデザインされた非日常空間で、芸術鑑賞と食事と買い物といった様々な活動をシームレスに経験することを目指している。

計画の進行と「9.11」

建物の計画は、アメリカの斜線制限であるエンビロップの中にすべてのボリュームを納めることと、敷地の中にあつた「ブラウストーン」と呼ばれるランドマーク指定の建物を保存することを条件として進められた。常識的に考えれば、すでに敷地いっぱいには立っている既存建物を残したまま計画するのは無茶なことだ。しかし唯一問題のない狭いブラウストーンの中庭を使うという、常識破りの条件設定

を敢えて選択することで、プロジェクトは景観派に対する政治力と形態上の説得力を獲得した。要求された巨大なボリュームをほんのわずかな中庭から支えるために、建物の形態と構造は必然的にアクロバティックなものとなる。まるで一本足で立つ巨大な生き物のような建物は、コンクリートの外壁を構造体としてまとい、プロイヤーの建物の上に大きな頭を覆い被せている。既存建物の隙間から上にのびる複雑に折れ曲がったその姿は、ニューヨークの街中に新しい時代の建築が現れたことを強く印象づけることだろう。コンピューター技術が可能とした構造解析にしたがって様々な形をした小窓が外壁にあげられ、内部空間から様々な方向にニューヨークの街への眺望を experience できることになった。各階の展示空間はエスカレーターによって結ばれることで、垂直方向の動線が確保され、立体的かつ都会的な芸術空間での experience が得られることだろう。こうしたすべてのアイデアを含めて OMA の提案 (計画 A) は過激で魅力的で批評的だった。そしてこの案は美術館関係者にも総じて好評だった。しかし、まさに計画が軌道に乗ろうとしたそのとき「9.11」というショッキングな事件がおきたのである。ニューヨークの気分は冷え込み、不安定な「タワー」に対する不安感は増大し、経済的な問題も持ち上がってきた。計画は完全に政治に巻き込まれた。政治と経済と芸術と

ニューヨークの美術館には建物に対して発言権をもついくつかのグループがある。ホイットニー美術館の場合も美術館自体、景観保存委員会 (LPC)、後援者委員会 (BOT)、近隣住区市民委員会といういくつかの関門を計画の実現までにくぐってゆく必要があった。またアメリカの美術館は独立した法人なので、資金の問題つまりは時の経済情勢が直接的にからんでしまう。ふつうに考えてもプロジェクトを成就させること自体が至難の業だ。大まかにいってこうした委員会の力関係は、2つの勢力の間で揺れ動いているようだ。一方では芸術を深く理解し、美術館建築に高度の芸術性を求める美術館サイドの人々が、他方ではあまり前衛的な建築を好まない政治家や資産家たちがいるという構図だ。こうした微妙なバランスをかじ取りしながら進んできたプロジェクトは、ちょっとしたきっかけで大転機を迎える。「9.11」という事件はきっかけとしては十分すぎた。OMA はすぐにこの逆風に対応するために計画を見直した。コストを下げるために「ブラウストーン」を取り壊す修正案 (計画 B) は、巨大な可動床というコンセプトでまとめられたが、オリジナルに比してやはり凡庸に見えてしまった。いかに彼らでも、常にとんでもなくおもしろいプロジェクトを繰り出し続けるのは容易ではない。修正案は政治的困難に直面することが明らかな「ブラウストーン」を壊してまで押し進める説得力に乏しかった。その後の資金難もあって結局は計画の中止が決定された。

ホイットニー美術館増築計画流産の歴史

10+1 (INAX 出版) 2004 No.35

ホイットニー美術館では、これまでも再三にわたって増築案が検討されてきた。70年代末にはフォスターによるタワー案があり、1985年頃にはマイケル・グレイブスの増築案が議論を呼んだ。このときグレイブスは、ポストモダンのデザイン手法に則って、いくつかのデザイン要素を寄せ集めるかたちで建物を再構成している。プロイヤーの建物を基壇の一部として取り込むことで最終的な建物全体の統一感を保とうとする計画で、ポストモダン時代の流れにのった非常にインパクトのある案として受け取られていた。しかし建物全体の規模が景観的に大きすぎるという声や、ニューヨークにある近代建築の重要な遺産であるプロイヤーの存在感が埋没してしまうという声が強かった。グレイブスも再三にわたって修正案を提出したが、プロイヤーの建物を軽視した印象が払拭されることはなく、アメリカ経済が停滞した時期と重なったこともあって、結局増築は見送られている。美術館関係者からすると増築は長年の悲願だったはずだ。プロイヤーやブラウンストーンに対する気の使い方は過去の反省もあったろう。一方でコールハースにとってもニューヨークでの仕事は特別の意味をもつ。彼の名を一躍有名にしたのが著作「錯乱のニューヨーク」であり、この街を研究することから建築家としての経歴をスタートさせたからだ。彼は、20年近くの時を経てニューヨークに自らの手による建物を作りたかったはずだ。しかし、不幸にも両者の夢は叶わなかったのである。

ニューヨーク近代美術館 (MoMA) 増築計画コンペ

一方で、同じニューヨークの近代美術館 (MoMA) もまた 1997 年に増築計画コンペを実施している。これは世界中の著名建築家を招待した話題性の高いもので、美術館建築のあり方を巡って様々な議論を巻き起こしたことは記憶に新しい。このコンペには OMA も参加し、そのとき提案されたオデッセイという巨大な移動装置は、NEWHITNEY への伏線となっている。MoMA は、その名の通り近代美術が主な収蔵作品である。しかし近代 = モダンが体制を批判する前衛だった時代からすでに半世紀以上が経過し、いまやモダニズムこそが体制の側に立ち、過去の歴史の一部として語られるようになった。そのことを考えると「未来の近代美術館をイメージする」というコンペのテーマは、当初から矛盾を孕んだものだったといえる。並み居る強豪を抑えて、最終的には正統派モダニストの谷口吉生案が最優秀となったのだが、選考委員会の示した結論は近代美術館のもつ保守性を改めて示すことになった。案の定この選択については前衛的芸術家や批評家たちから評判が悪かった。ニューヨークの街に世界で最も重要な現代建築を生み出すチャンスをふいにしたという意見だった。しかし谷口案は景観委員会や後援者委員会に対する受けは悪くなかったようだ。コンペの結果とはいえ、敷地の中の古いホテルを取り壊し、ジョンソンやペリによる建物の一部を改修する計画が実現したのだから、歴史を大切にすニューヨークの人々の反応としては、かなり好意的だったことになる。

MoMA と NEWHITNEY の差

それにしても興味深いのは、フォスター、グレイブス、コールハースというそれぞれの時代を代表する前衛的な建築家を使ってきたホイットニー美術館がことごとく増築に失敗してきた一方で、ジョンソン、ペリ、谷口といったモダニストの建築家を起用した MoMA の方は着々と増築を進めてきたことである。もちろん様々な背景の違いはあるが、結果だけを見ると両者の戦略の違いは明らかだ。1920年代に「インターナショナル・スタイル」展を開き、建築界でのモダニズム発祥の地となった MoMA は、その伝統を守ることで政治的、経済的な地位を確立してきたのだ。しかし見方を変えれば、モダニズムの輝かしい歴史は体制の中でその意義を固定化しつつあり、こうした環境下では今後の発展は見込みにくいという解釈もできるだろう。NEWHITNEY が中止になる前に、美術館側はコールハースの関心がニューヨークよりも中国のプロジェクトに向けられるのではないかと心配した。実は嗅覚の鋭い彼のことから、その憶測もあながち外れてないのかもしれない。

OMA の前衛性とオランダの合理主義

一般に社会は前衛に対して保守的に振る舞う。いやむしろだからこそ前衛はそのアイデンティティを維持できる。コールハースは自らのプロジェクトの前衛性を守り通すために、凡庸さや保守性を徹底して排除する。プロジェクトをまとめるときに必ず徹底した合理性に裏付けられたシナリオを作るのだが、そのシナリオがセンチメンタリティや常識に支えられた既存概念を超越する度合いが高いほど、プロジェクトはより魅力的になってくる。彼らは建築としての完成度や美しさという一般的なものをほとんど意識していない。建築を導き出す論理的なシナリオとその結果として得られた建築空間の強さにこそ、彼らの前衛性が発揮されることがわかっているからだ。こうした OMA の戦略は、オランダ文化を抜きには語れない。オランダは徹底した合理主義の国だ。彼らは「世界は神が作ったが、オランダはオランダ人が作った」という。国土の3分の2が海拔下にあるこの国は文字どおり自分たちの生活する国土を自分たちの力で作り上げてきたが、その過程には自然に対するセンチメンタルな感傷など抱いてる余裕はない。日夜水との戦いに明け暮れた彼らの祖先は合理主義を徹底することでのみ、生き延びることができたのである。また一方で、オランダは海運国として貿易によって身を立ててきた。17世紀には世界中にその活動を広げ、江戸時代の鎖国政策をとっていた日本とも交易を続けた数少ない国である。商売のためなら彼らは巧みに異国語をあやつり、様々な価値観を柔軟に受け入れたからだ。また彼らは合理主義に裏付けられた自由を大切にす。大麻や売春でさえ、人類始まって以来の営みだからといって容認する寛容さは、取り締まりを厳しくすればかえって闇社会を増

大させるだけだという合理的考えに基づいている。センチメンタリティを排除した徹底した合理主義。既成概念に捕われない自由な発想。世界中を仕事をもとめて飛び回る軽やかさ。こうしたコールハースの個性はまさにオランダ文化の延長線上にある。しかしかつてこれほど著名かつ未完のプロジェクトが多い建築家がいたろうか。ラ・ウ・ィレット公園、シーターミナル、ハーグ市庁舎、ZKM、パリ国立図書館、ジェシュエ大学図書館、ユニバーサル・ビル...ざっと考えてみてもこれだけある。レム・コールハース+OMAは、その過剰ともいえるメディアへの露出度によって、実作とそうでないものの意味の差を感じさせない。「ホイットニー美術館増築案=NEWHITNEY」は、そんな彼らの系譜に新しい歴史を付け加えた。このプロジェクトは今後21世紀の美術館を語る上で、おそらく一つの指標となることだろう。

参考文献: a+u 398, OMA/experience The museum of Modern Art Expansion, Carter B. Hosley, the city review 21 世美術館研究, 暮沢剛巳, 金沢 21 世紀美術館準備委員会 Architecture; Designing Museums: often not a lively art, Herbert Muschamp, New York Times, June 28, 1998 S,M,L,XL,OMA,010publishers 美術館の概念は無限に拡張可能でない?, クリス・デルコン、アール、2002 年 1 月号

共生について

本修士設計のテーマである共生についてここでは補足する。

まずは大江宏の混在併存について共生との類似とみなし、以下を添付する。

人間の生活はその地域固有の要素に多かれ少なかれ外来の要素が混じり合って成り立つものだが、明治以降の日本は終止これが「洋風」「和風」の二相対比の形で特殊な現れ方をしている。すでに一世紀の近い年月を経過しながら、この二つの相はかなりはっきり分裂した形のまま今日もなおわれわれの生活の日々に根強く併存しているのである。（中略）

公生活を代表する「洋風」は生産的であると同時に進歩的であり、私生活面を支える「和風」は非生産的であると共に退嬰的であるといった連想にまでつながっていくのである。このような固定観念は明治政府の富国強兵策にはじまって、戦前の生産増強時代を経、今日の高度成長ムードにまで一貫する日本の国家政策の反映として、生産のフェーズに直結する公的生活を主と見、消費のフェーズに連なる私生活面を従と思いつくことになったことの1つの現れでもある。この錯覚はまた一方では建築の本質的な進展をはばんだ根本的な要因ともなり、今日なおそれは訂正されていない。

一方明治以来、外来といえば直ちにそれは西欧を意味し、西欧的であるということは即先進的であり、同時にそれはもっとも良いのだとする信条が長らく日本の文明を支配してきた。日本を急激に開化し、短時日の間に急進せしめたのは、確かにこの信条の作用だった。建築においても明治初年の洋館様式舶来の段階、大正年代の近代建築移入の段階、戦後の技術革新の段階など結果においては、そのいずれもこの大原則がそのまま繰り返し適用された形で今日に及んだのである。しかしながら、今後ともなおこの大原則が私たち日々の生活内容をはたして本質的に充実しうるものになるか、またこの信条は文明を開化し、それを急進せしめることはできても、文化という段階をもなお本格的に押し上げるような積極的な作用を期待しうるものかどうか、現在の段階はいよいよその決着を迫られる最後の時点にわれわれは逢着したものである。

大江宏 新建築 1966 7月号 新建築社より

この文章は 1966 年に発表されたものである。

大江宏は其中で「和風」と「洋風」について述べ、それぞれ日本の歴史をみて、単純にあいまいみれないのを承知して、お互いに歩み寄るしせいがあるのではないかという考えを模索しようとしている。

この姿勢は 1966 年以前、1954 年の海外への旅以降から徐々に深まっていったもので、1965 年の二度目の海外への旅によって明らかな実感と変わったものと考えられる。

しかしながら、大江宏が目指したものは、単なる折衷様式のことを指していない。そのことは、大江が酸素は酸素、水素は水素であり水であっても H と O はそれぞれ併存するという考えをもっていることからわかる。

相反するものが併存しながらも決して交われないということである。このことは共生の概念とちかいものがあり、昨年亡くなった建築家黒川紀章もこのことに近いことを自らの共生の概念のなかで発言している。

共生という言葉は根本的な対立があってもなおかつお互いがお互いを必要とする関係。

と定義している。 モダニズム建築の軌跡 監修内井昭蔵 INAX 出版 2000 年 p314

また設計における共生について黒川紀章はこう述べている。

建築とか都市でも自然のあり方と言いますかネーチャーではなく自然（じねん）とでも言いましようかそういう自然のあり方を設計のなかにどう組み込むか…、だと私は考えています。

ごく自然にあるあり方を追求するなかで建築の中に自然も回復できると思うし、そこのあたりが共生の考え方だろうと思います。

モダニズム建築の軌跡 監修内井昭蔵 INAX 出版 2000 年 p320

私は 40 年間「中間領域」や「道」も言い続けています。なぜそういうものを重視し外でも内でもない領域をつくらうとしているかと言いますと、それが非常に有効な共生の方式だからなんです。たとえば自然と都市がある。その時自然をなまの自然とらえたらこれほど怖いものはない。洪水も台風もそうですが都市や人間をも簡単に殺す力をもっていますから生の自然は人間とか都市と対立しているわけです。だから問題はその中間領域をどうやってつくるか。

モダニズム建築の軌跡 監修内井昭蔵 INAX 出版 2000 年 p321

このように共生の考えを掲げている。

chapter 3 前川國男研究・分析

前川國男年表

前川 國男

1905年(明治38年)新潟県新潟市学校町通2番町に生まれ、東京に育つ
1918年(大正7年)真砂小学校(現文京区立本郷小学校)卒業
1922年(大正11年)東京府立第一中学校卒業(4修卒)
1925年(大正14年)第一高等学校理甲卒業
1928年(昭和3年)東京帝国大学工学部建築学科卒業(谷口吉郎と同年)、
パリへ行きル・コルビュジエのセーヴル通りの事務所に入所。
シャルロット・ペリアン、アルフレッド・ロート、ホセ・ルイ・セルトと親交
1930年(昭和5年)前年渡仏した坂倉準三と入れ代わるように帰国。東京レーモンド建築
事務所に入所
1935年(昭和10年)事務所開設(銀座商館ビルに入居)
1945年(昭和20年)銀座の事務所空襲で焼失。目黒の自邸に事務所機能を移転
1954年(昭和29年)MIDビルが四谷に完成。自邸から事務所を移転
1955年(昭和30年)ル・コルビュジエ来日、前川事務所訪問
1956年(昭和31年)日本建築家協会理事に選出
1959-1962年(昭和34-37年)日本建築家協会会長
1963年 オーギュスト・ペレ賞受賞
1965-1969年 UIA(国際建築家連合)副議長
1968年(昭和43年)第一回日本建築学会賞大賞受賞。
受賞者のメッセージとして「もうだまっていられない」を発表し、
建築家と建築界における精神の自由と連帯意識の欠如を批判する。
1974年 埼玉県立博物館で芸術院賞受賞
1979年 フランス共和国がレジオン・ドヌール勲章(オフィシエ)を授与
1986年(昭和61年)逝去。受賞歴として他に毎日芸術賞、朝日賞。

財団法人木村産業研究所(1932年)国登録文化財
自邸(1942年、江戸東京たてもの園に移築)
プレモス住宅(1949年)木造の組立て住宅
日本相互銀行本店(1952年、さくら呉服橋ビル)第四回日本建築学会賞作品賞
神奈川県立図書館・音楽堂(1954年)第六回日本建築学会賞作品賞
MIDビル(1954年)
国際文化会館(1955年、坂倉準三と吉村順三との共同設計)第七回日本建築学会賞作品賞
岡山県庁(1957年)
晴海高層アパート(1958年、現存しない、一部部材保存[1])
弘前市役所(1958年)
ブリュッセル万国博日本館(1958年、現存せず)
京都会館(1960年)第十二回日本建築学会賞作品賞
東京文化会館(1961年)第十三回日本建築学会賞作品賞
国立国会図書館(1961年)
紀伊國屋書店新宿店(1964年)
弘前市民会館(1964年)
蛇の目ビル(1965年)第十七回日本建築学会賞作品賞
埼玉会館(1966年)
日本万国博覧会鉄鋼館、自動車館
埼玉県立博物館(1971年)1974年日本芸術院賞(現・埼玉県立歴史と民俗の博物館)
東京海上ビルディング(1974年)
東京都美術館(1975年)
ケルン市立東洋美術館(1976年)
熊本県立美術館(1977年)
山梨県立美術館(1978年)
福岡市美術館(1979年)
宮城県美術館(1981年)
弘前市斎場(1983年)
熊本県立劇場(1983年)
新潟市美術館(1985年)
国立国会図書館新館(1986年)

・前川國男と 20 世紀

前川國男は後期の作品では日本建築を思わせるものになっているが前川の建築の原点にさかのぼると極めて対称的な作風のル・コルビュジェに行き着く。

前川は 1928 年 3 月 31 日東京大学卒業式の夜、パリのコルビュジェのもとに旅立った。2 年間のパリ生活のあと日本でアントニオ・レーモンドの事務所に在籍する。そこで木村産業研究所を残しているがこの作品にはコルビュジェの影響が現れている。

1935 年に独立した前川の前に戦時における鉄鋼資材統制がしかれ 1950 年に解除されるまでの間、前川は木造建築の設計に携わることになる。その時期の作品として自邸 (1942 年)、紀伊国屋書店 (1947 年) などがある。その傍らコンペなどの応募も行っていった。

その後プレモスで戦後の住宅供給を目的としたプレファブ住宅を考案した。

日本相互銀行本店 (1962 年) 以降の作品ではテクニカル・アプローチという方法論を唱え、建築部材の工業化、構法の簡略化を推し進めていく。このことにより中期、後期の作品にみることができる打ち込みタイルへとつながっていく。

その後、東京文化会館 (1961 年) や神奈川県青少年センター (1962 年) といった作品を残し建築の作家性の強い造形的な部分を残している。

このような建築の道のりのあとにたどり着いたのは一筆書きの壁構成による建築である。そして一連の美術館作品と行き着くのである。

・テクニカルアプローチと打ち込みタイル

前川國男が初めて打ち込みタイルを使用したのは 1961 年に竣工した日本相互銀行砂町支店である。

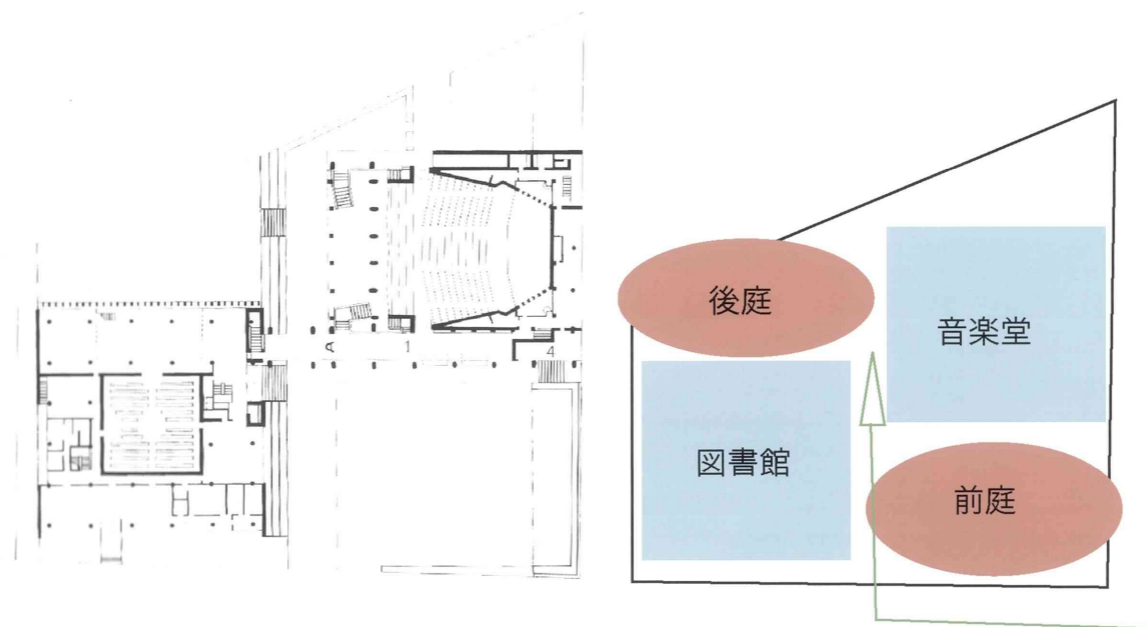
打ち込みタイルとは従来のコンクリート壁にモルタル等の接着材料でタイルを貼るあと貼り工法とは異なり、タイルをあらかじめ外型枠に釘止めしたうえでコンクリートを流し込むことによってコンクリート躯体とタイルを一体かされる手法である。この工法により剥落しない耐久性のある壁が可能となった。これは日本相互銀行本店からはじまるテクニカル・アプローチであると同時に敷地の持つ場所性、土着性を重視した後期美術館作品において欠かせない要素となっている。

林原美術館 (1963 年) では屋根には T 型プレストレスコンクリート板が用いられており建築のプレファブ化が試みられているといえる。

神奈川県立図書館・音楽堂

・後期美術館作品にみられる建築的考察。
前川國男の後期美術館作品は師であるル・コルビュジェからの開放といえる。それまでの前川國男の近代建築とは一線を画して、日本建築のような水平性及び透明性が現れている。
前期のボックスの中に機能を配置していく西洋的近代建築から機能と機能をつなげ連動していく空間が作品に現れている。
これは一筆書きと呼ばれる連動するプランをしめしている。

・配置構成及び全体計画分析
後期作品を分析するにあたり前期作品について幾つか触れることにする。
まず始めに分析するのは神奈川県立図書館・音楽堂である。横浜の小高い丘の上に建つこの建物は近年の保存活動のおかげで現在も多くの方に愛され高い利用率を誇っている。この作品は図書館と音楽堂という2つのボリュームがずれてそこに前庭と後庭というふたつの外部空間を生み出している。前庭は駐車場にもなっておりまた使用者のメイン導線にもなっており動的な庭となっている。後庭は一転図書館と音楽堂のガラスのホワイエによって構成される静的な空間となっており、前期作品のなかでも最も後期の美術館作品に近い日本建築を意識したものになっていると考えられる。
しかしながら後期にみられる壁の連動的構成は見受けられず、視界による空間のつながりのみとなっている。
導線計画は音楽堂・図書館という完結した機能のため複雑にはなっていないが音楽堂の吹き抜けまわりの階段などはコルビュジェの影響もあったと考えてよいだろう。



神奈川県立図書館・音楽堂
神奈川県
1954年
神奈川県横浜市
2900/5798
地下1階、地上3階
RC一部S造
単位平方メートル

全体構成 2つのボリュームをブリッジが繋ぎその下は抜けとなっている。

林原（旧岡山）美術館

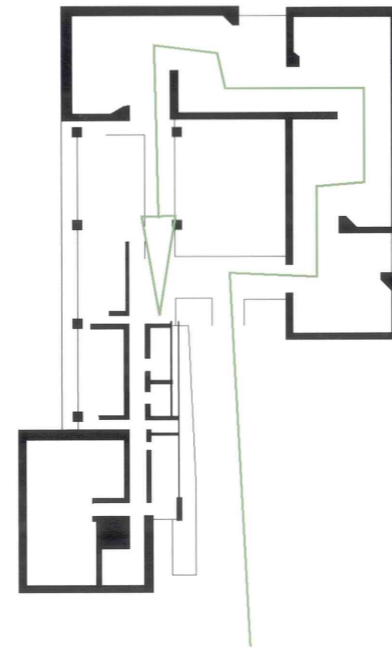
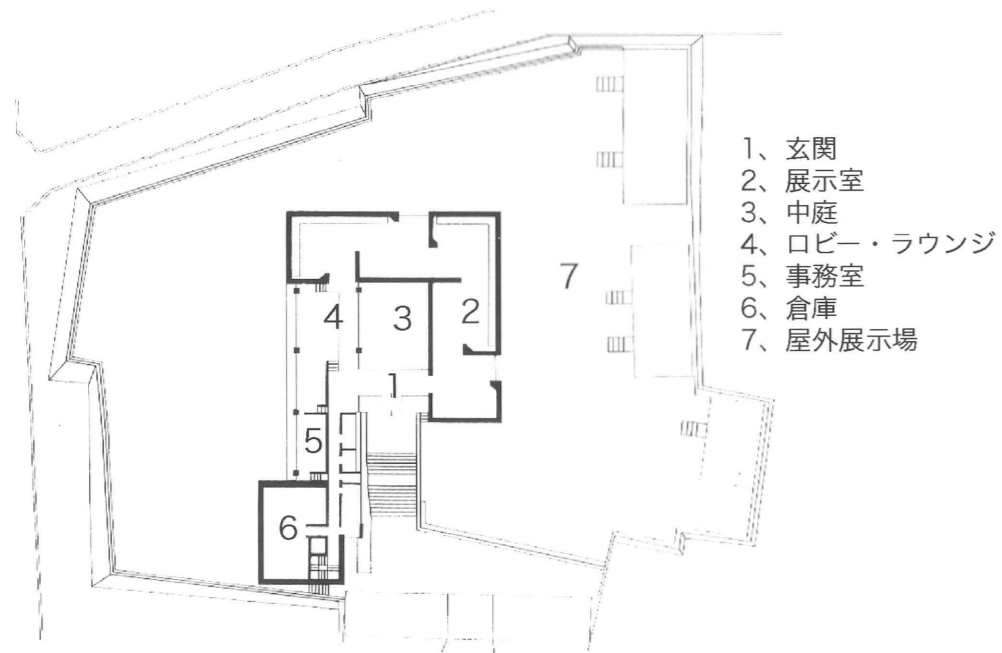
岡山城の内堀に面した長屋門と土蔵を残した旧藩主の屋敷跡に実業家林原一郎が収集した東洋古美術を展示する美術館。

長屋門をくぐり砂利敷きから石畳、石垣に沿ってアプローチというふうな風景の中を体験していくと小さな美術館がある。前川國男が言う一筆書きプランの美術館であり門をくぐり抜けてからのアプローチの延長上に美術館が存在するように館内では静かにL字壁の内側を流動的に抜けていく。

中庭を中心に展示室と庭に面したラウンジがあり、T型プレストレスコンクリート板の屋根による無柱空間、壁構造の外壁に積まれた焼きレンガとコンクリート打ちっ放しの庇が独特である。

レンガ、水平性、一筆書きの平面による流動的空間構成とその後の前川國男の作品を予感させるかのような美術館になっている。

林原美術館
林原美術館
1963年
岡山県岡山市
1038/1247
地下1階、地上2階
RC造
単位平方メートル

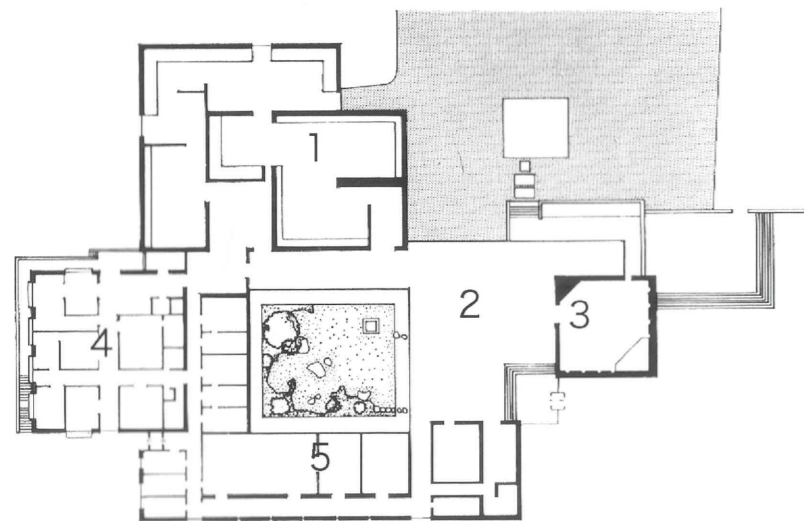
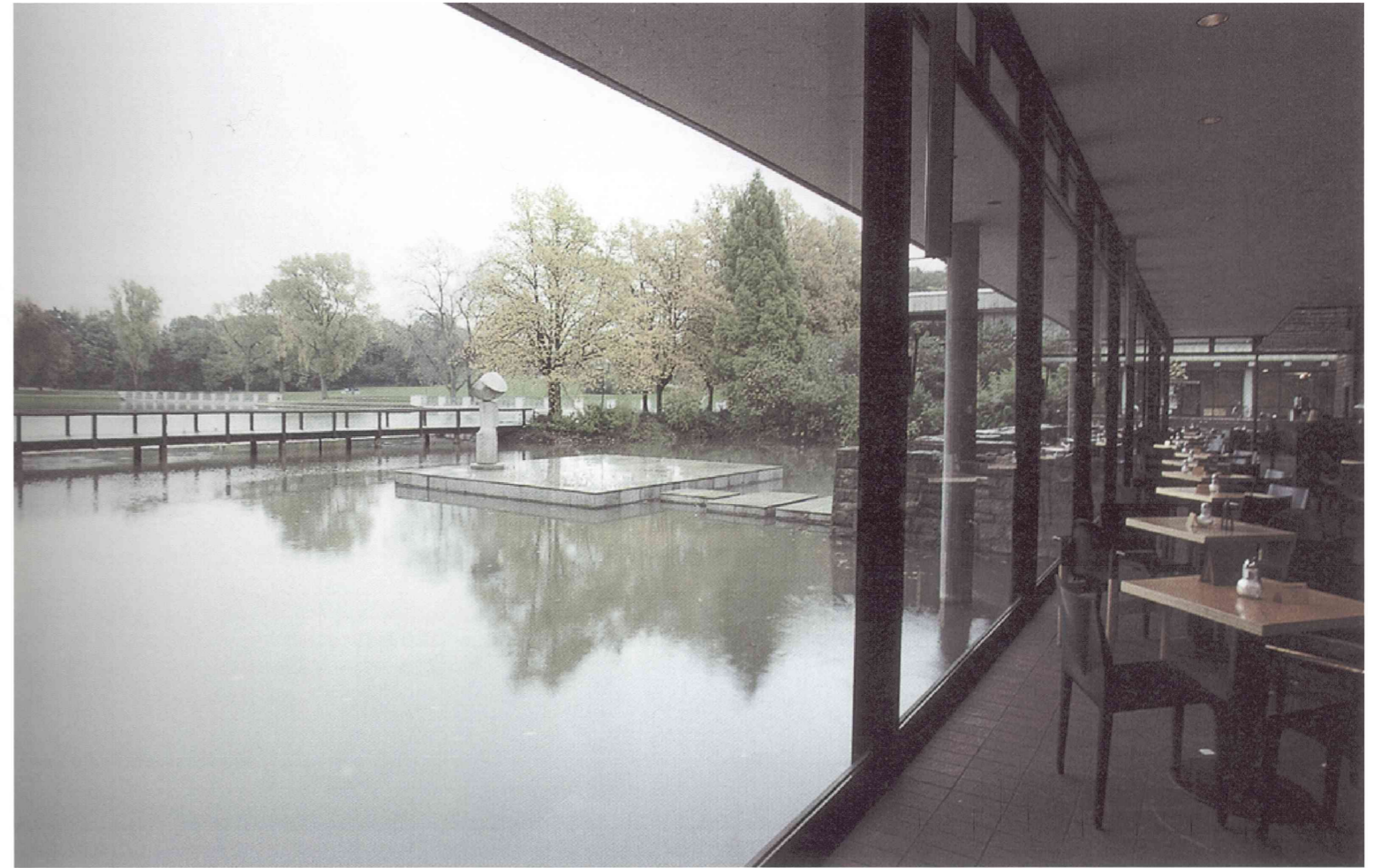


ケルン市立東洋美術館

現存する唯一の前川國男の海外建築。
アーヘン湖のほとりにあり、その風景を取り込むようにたたずむ美術館。

・配置構成及び全体計画分析
エントランスから湖と中庭に挟まれたロビーを抜け展示室に至る構成となっている。
前川作品において囲われた中庭が存在するのが特徴である。
講堂、展示室、管理諸室、研究室の4つのボリュームからなりたっている。

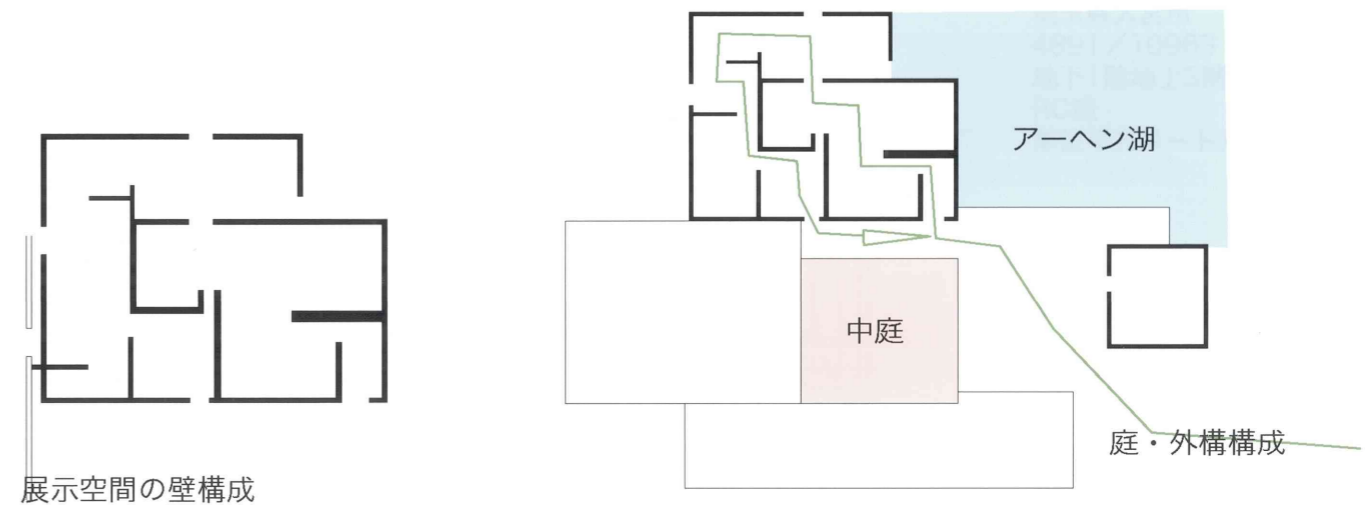
・壁構成
展示室はL字壁によって来館者を引き込み所々で外の風景をみせる前川國男の
後期美術館作品の特徴が現れているが、展示室内においてこのような風景が
現れていることはケルン市立東洋美術館の特徴といえる。
来館者は美術作品とともに外部の自然をも鑑賞することになる。



ケルン市立東洋美術館
ケルン市
1977年
ドイツ・ケルン市
3140/3995
地上2階
RC造

単位平方メートル

- 1、展示室
- 2、ロビー
- 3、講堂
- 4、管理諸室
- 5、研究室
- 6、アーヘン湖



埼玉県立博物館

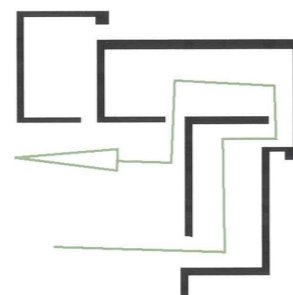
L型の壁の構成打ち込みタイルの外観など林原美術館以降の後期美術館作品のひとつ。
一筆書きプランという連動的な空間で内と外をつなぐ。機能が配された箱の外壁から生まれた庭空間は多様性に富んでいる。

・配置構成及び全体計画分析

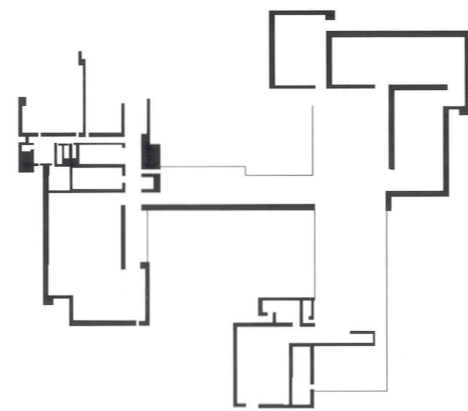
エントランスからは視線が抜け外部の自然が飛び込んでくる。
ロビー、中庭が中心的な場となっており展示空間と展示空間を自然につないでいる構成となっている。
後期美術館作品にみられるいくつかのボリュームからなりたっているという特徴がある

・壁構成

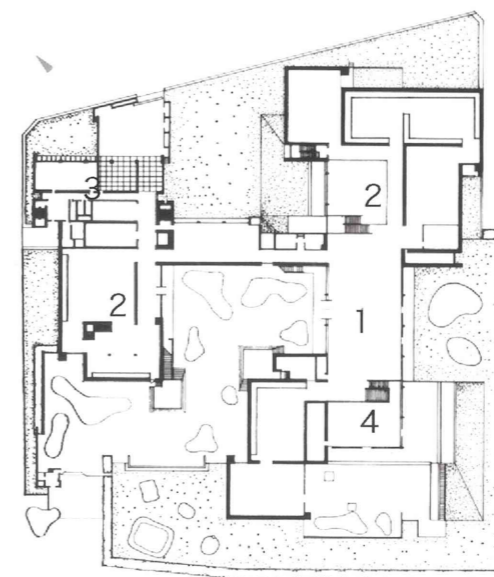
展示室はL字壁によって来館者を引き込み所々で外の風景をみせる前川國男の後期美術館作品の特徴が現れている。
来館者は美術作品とともに外部の自然をも鑑賞することになるという他の美術館作品と同様の特徴がみられる。



展示空間壁構成



全体構成



埼玉県立博物館
埼玉県
1971年
埼玉県大宮市
4891/10963
地下1階地上3階
RC造
単位平方メートル

- 1、エントランスホール
- 2、展示室
- 3、管理諸室
- 4、食堂

熊本県立美術館コンテンポラリー棟

戦後も60年以上経過し、戦後モダニズム建築も様々な道を歩んできている。
前川國男設計の熊本県立美術館(1977)にコンテンポラリー棟及びライブラリー市民ギャラリーなどを増築することにより、使い続ける建築を考える。

既存熊本県立美術館を尊重しつつも・・・

- ・ 既存とはことなる空間の提案
- ・ 新旧建物の結節点や周辺環境との中間領域の豊かさをもとめる。

既存部には最大限手をつけず敷地内で増築を計画する。

目指すは時間を越えて過去や環境と共生(コ・リビング)する建築。

共生デザインの試み
熊本県立美術館コンテンポラリー棟

戦後も60年経った今戦後モダニズム建築のたどっている道は様々である。本計画では戦後モダニズムを先導した前川國男設計の熊本県立美術館に新たにコンテンポラリー展示室、アートライブラリー、市民ギャラリーを増築する昨今事例の多い計画を通して使い続ける共生のデザインを試みる。

設計・提案

- 1、現在の樹木・植栽に配慮した全体・配置計画
- 2、既存から連続する展示空間/一筆書きプラン
- 3、新たな空間をもつ独立したアートキューブ
- 4、新旧の結節点に生まれる中間領域と新たなアクティビティ空間（コ・リビング）の創造

熊本県立美術館

敷地面積 14200
建築面積 3793
延床面積 7930

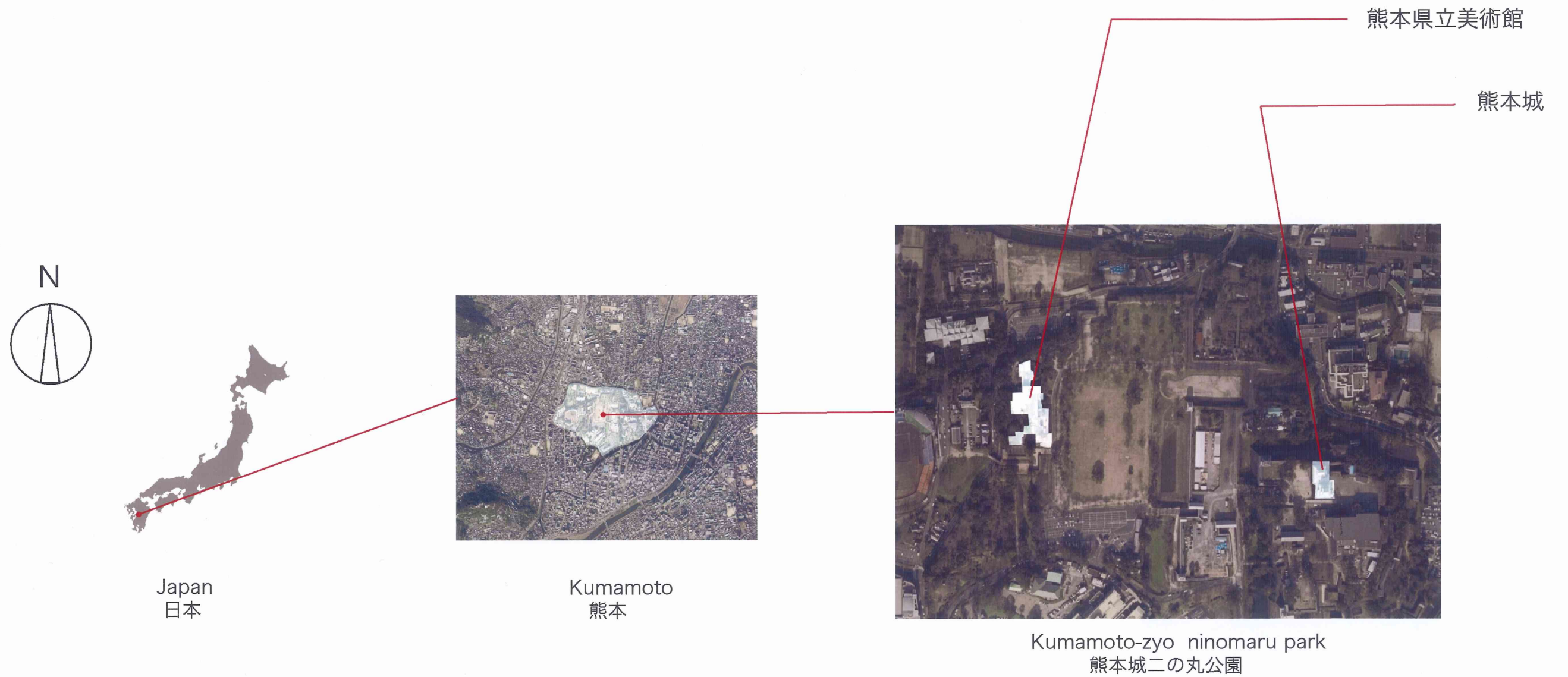
	室名	単位 (平方メートル)
展示 Exhibition areas	常設展示	902.98
	展覧会場	1072.64
	古墳室	339.37
	小計	2314.99
教育普及 Educational areas	多目的室	334.08
	講堂	176.56
	小計	510.64
サービス Guest amenities	喫茶室	88.47
	ホール	361.04
	ロビー	361.69
	小計	811.20
収蔵 Storage	収蔵庫 No1	211.81
	収蔵庫 No2	211.80
	収蔵庫 No3	211.80
	収蔵庫 No4	209.44
	収蔵庫 No5	217.66
	荷解室	425.73
	小計	1488.24
事務学芸 Administrative & Cultural rooms	館長室	36.63
	会議室	55.57
	事務室	123.13
	応接室	36.22
	図書室	56.57
	書庫	49.74
	写真室	29.85
小計	387.71	
管理 Management	守衛室	12.48
	監視室	21.90
	小計	34.38
機械室 Machinery room	機械室	823.39
	小計	823.39

熊本県立美術館増築部
コンテンポラリー棟

建築面積 2582
延床面積 6941

	室名	単位 (平方メートル)
展示 Exhibition areas	コンテンポラリー常設展示	809
	コンテンポラリー企画展示	430
	展示室（アートキューブ）	466
	小計	1705
教育普及 Educational areas	アートライブラリー	287
	アートロフト（多目的室）	268
	キッズサロン	68
	市民ギャラリー&ワークショップ	490
	小計	1113
サービス Guest amenities	ミュージアムショップ	88
	ロッカー室	24
	ミーティングラウンジ	66
	印刷室	23
	コンピューターコーナー	28
	セミナースペース	77
	ルーフガーデン	370
	エントランスロビー	160
	小計	836
	収蔵 Storage	収蔵庫
ライブラリー書庫		87
小計		662
事務学芸 Administrative & Cultural rooms	学芸室	87
	研修室	86
	コンピューター・ボランティア室	48
	小計	221
管理 Management	フロント・管理室	28
	小計	28
機械室 Machinery room	機械室	524
	小計	524

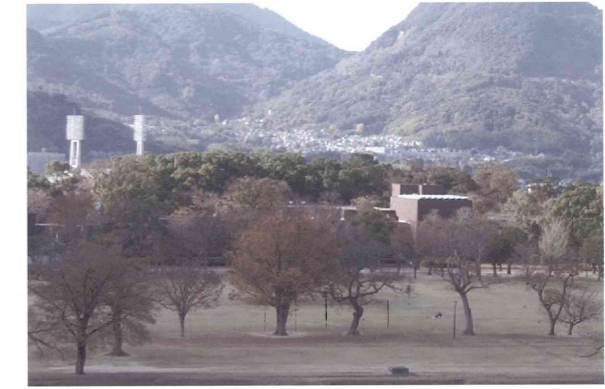




敷地は熊本県熊本市。熊本城の高台二の丸公園内にある。多くの木々が生き茂る。
敷地の東側には熊本城、公園があり修学旅行生、外国人観光客、などなど多くの人たちのアクティビティーが現れる。凧揚げ、サッカー、ランニング、鬼ごっこ…。
裏手の西側は崖地となっており崖下の車道からは美術館の存在は木々の中に消える。静と動がある敷地である。

SITE/敷地説明2 熊本県熊本市熊本城二の丸公園

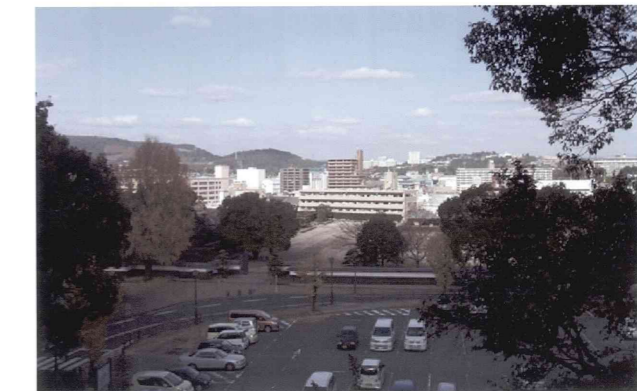
熊本県立美術館



熊本城から美術館を見る木々の間から収蔵庫が顔をだす。



熊本城二の丸公園から熊本城を見る。
様々な人、アクティビティーが公園に現れる。



美術館の西北側から崖下を見る。
美術館が高台にあることがわかる。



二の丸公園から美術館をみる。木々に隠れて存在を消している。



熊本城天守閣



熊本県立美術館データ

熊本県立美術館(本館・分館)

●施設概要

敷地面積(本館) 14,200 m²

建築面積3,793.65m²

延床面積7,930.13m²

●施設の機能

展示の基本理念

○古代から現代美術までを網羅する総合美術館を目指す

○熊本の文化財や美術を紹介する地方色豊かな美術館を目指す

○子どもが美術に親しめる楽しい美術館を目指す

開館時間

○本館9:30~17:15 (入館は16:45まで)

●分館9:30~18:30 (入館は18:00まで)

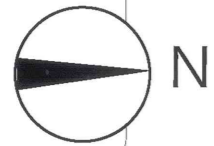
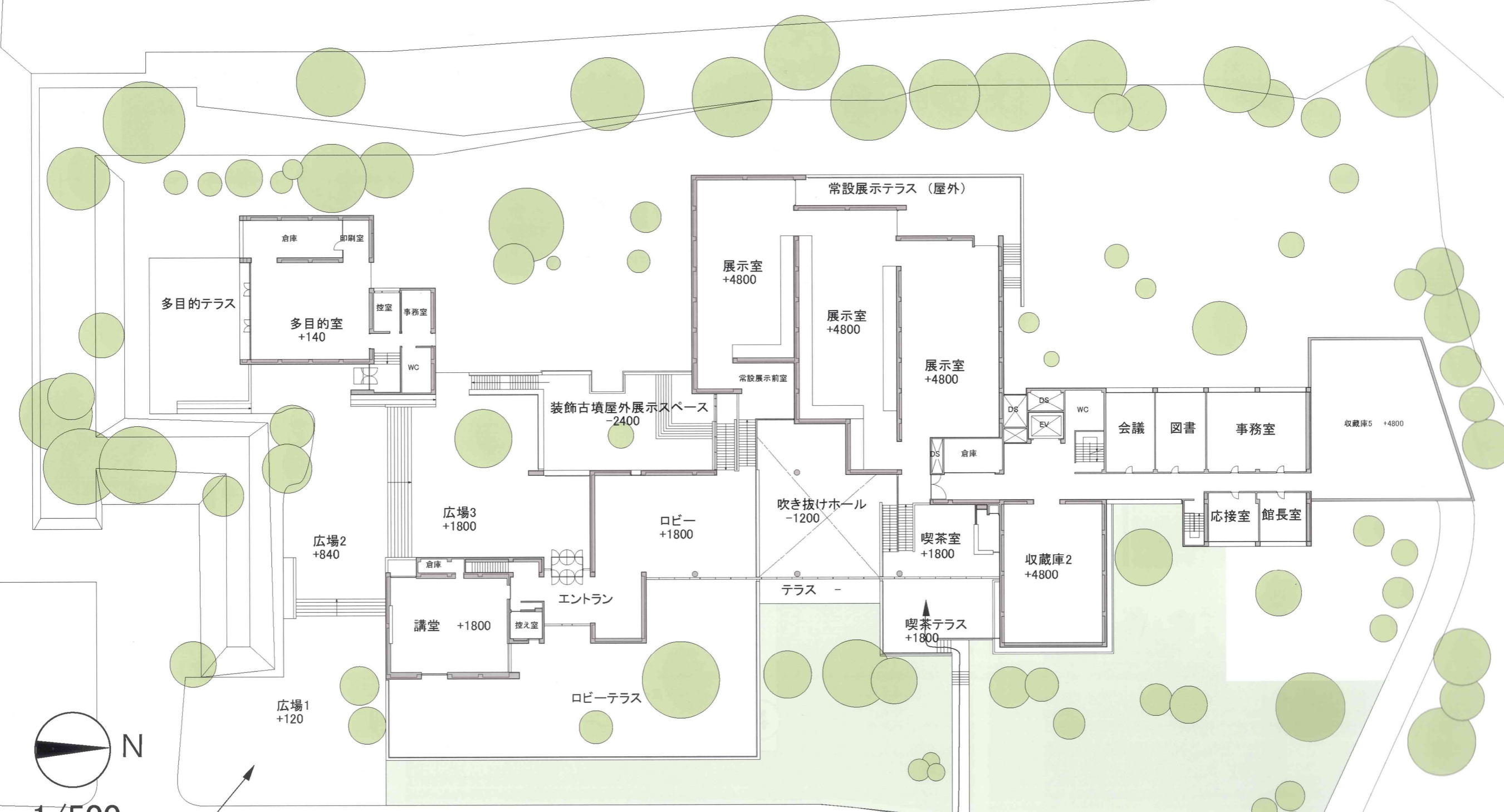
※土・日・祝日・休日9:30~17:15 (入館は16:45まで)

KUMAMOTO PREFECTURAL MUSEUM / 熊本県立美術館

PLAN / 1階・中2階・2階平面図

現況

約7メートル下がった場所に車道が走っている。



1/500

熊本城から公園を歩いてアプローチ

熊本城公園 二の丸広場

様々な人が様々なことを公園で行っている。

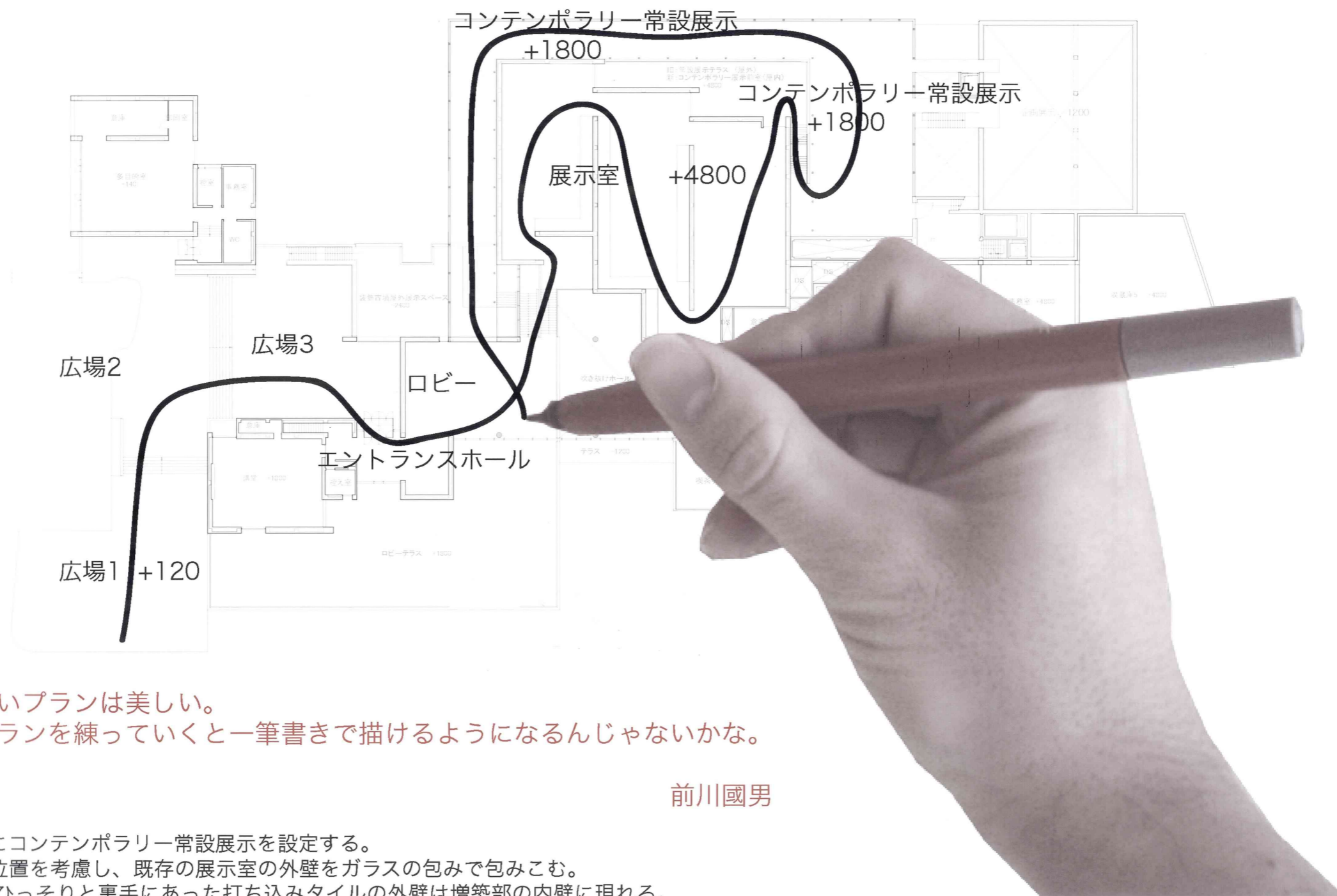
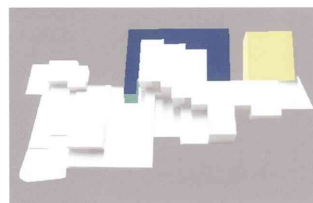
遊歩道

食事だけ食べて帰る来客者も多い。

搬入口
関係車両以外車両通行禁止

2、既存から連続する展示空間/一筆書きプラン

02



いいプランは美しい。
プランを練っていくと一筆書きで描けるようになるんじゃないかな。

前川國男

敷地内においてまず始めにコンテンポラリー常設展示を設定する。
既存の搬入口、学芸室の位置を考慮し、既存の展示室の外壁をガラスの包みで包みこむ。
このことにより、30年間ひっそりと裏手にあった打ち込みタイルの外壁は増築部の内壁に現れる。
エントランスからレベルをのぼり続けた来館者は既存展示室を抜けて室内に変わったテラスを通り
一度下りそして打ち込みタイルの壁がロビーまで導いていく。

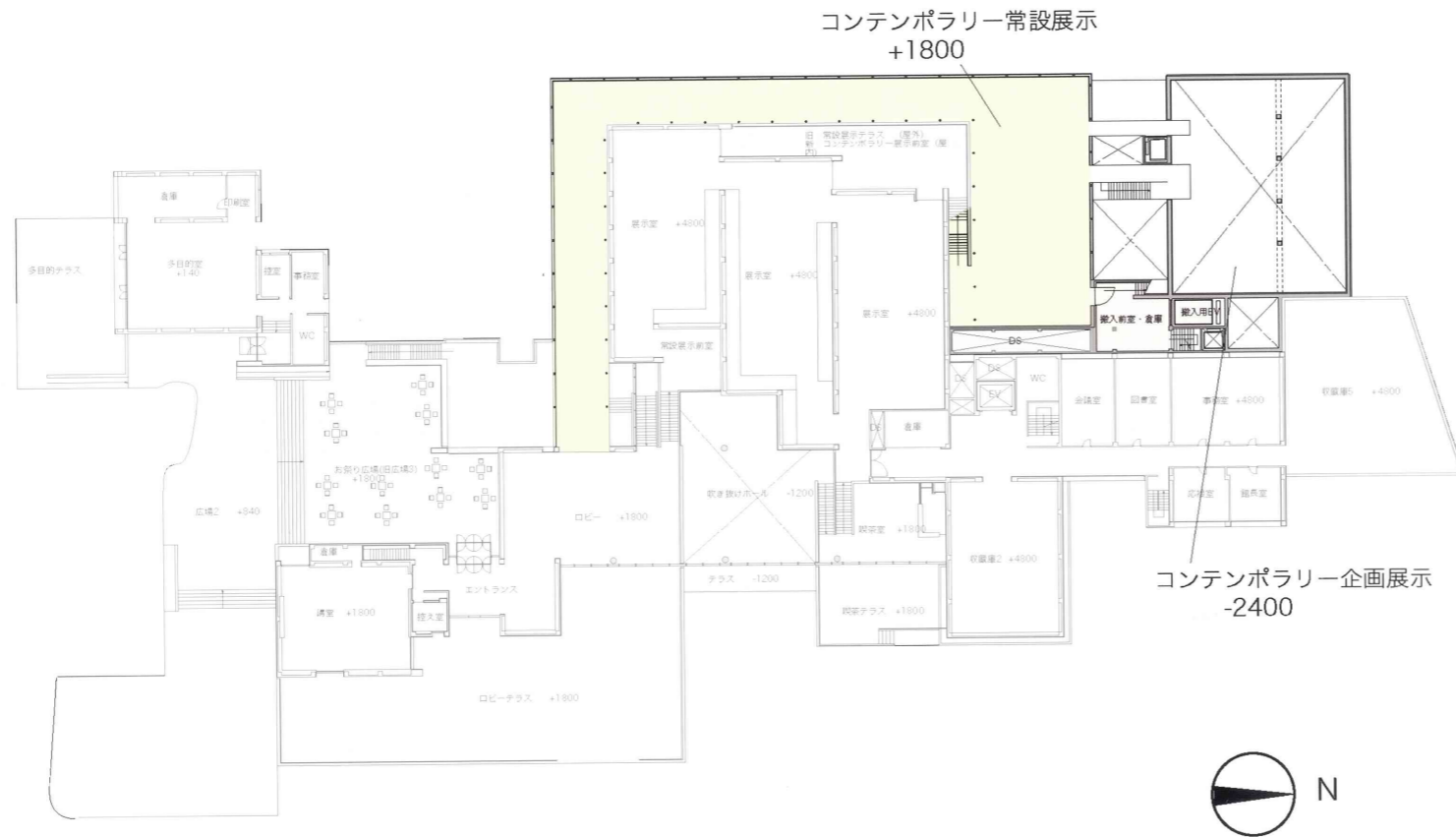
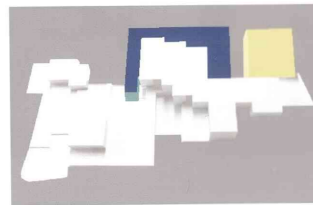
前川國男の一筆書きプランの延長上にあるとともに壁の内側で来館者を導く既存と対比し、
壁の外側で導いていく。

又、コンテンポラリー企画展示室を北側に配置する。常設、企画展示とも既存の搬入口を利用して
スムーズな搬入動線としている。

前川國男の一筆書きプランの延長上にあるとともに壁の内側で来館者を導く既存と対比し、壁の外側で導いていきます。

2、既存から連続する展示空間/一筆書きプラン

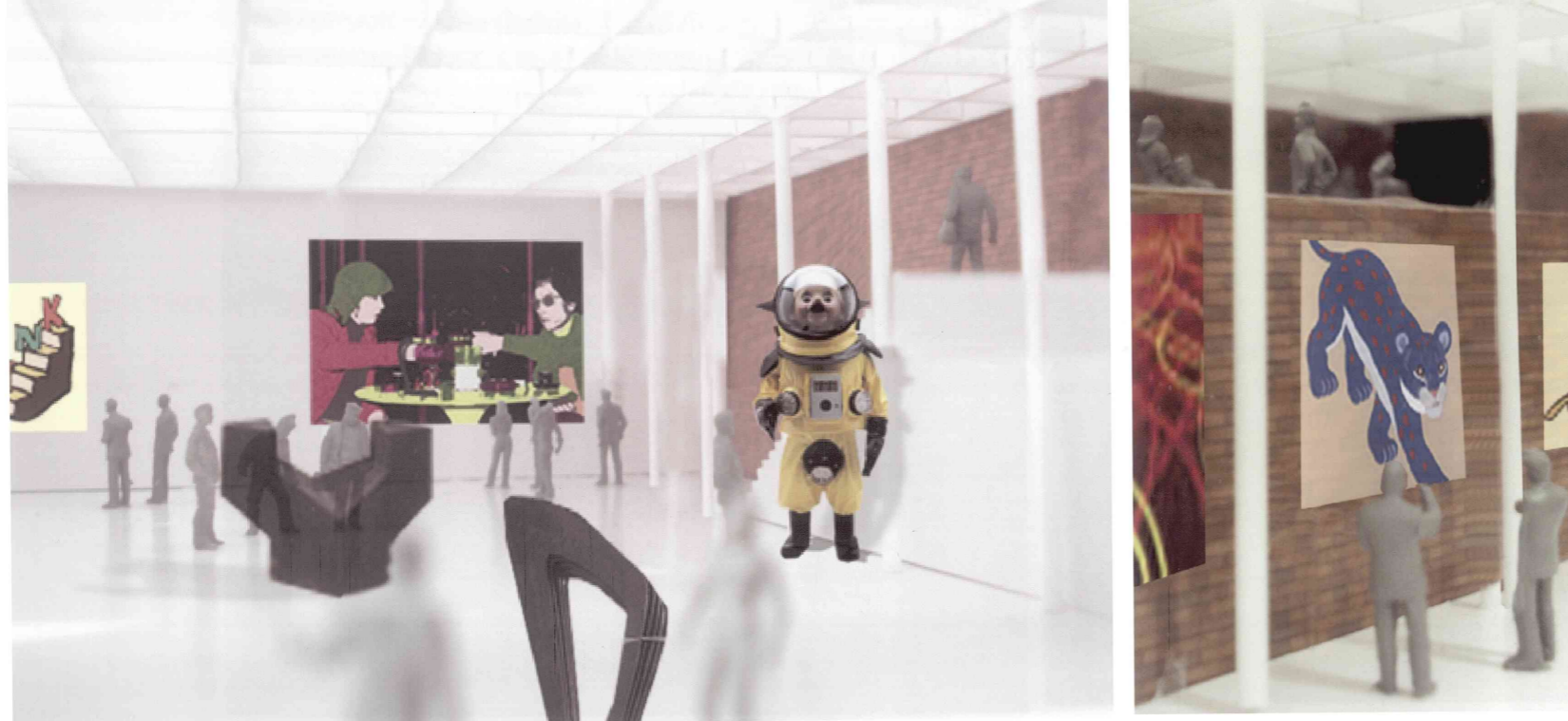
02



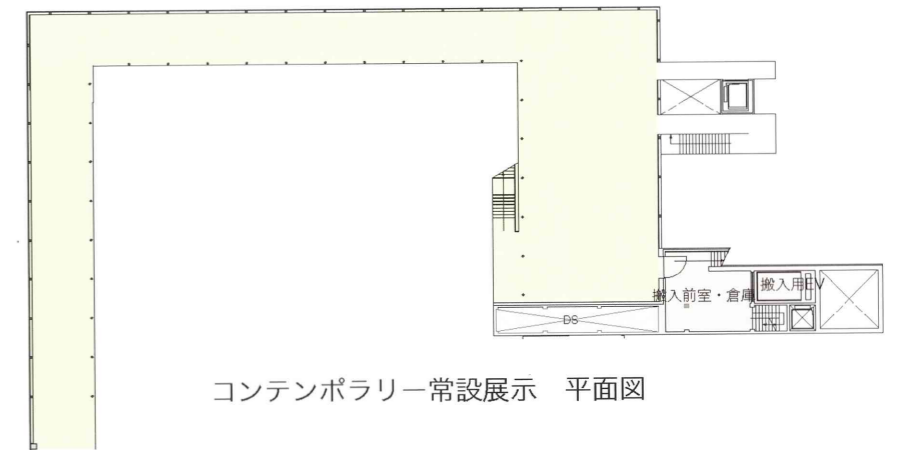
コンテンポラリー常設展示 809 m²

コンテンポラリー常設展示の空間・環境計画

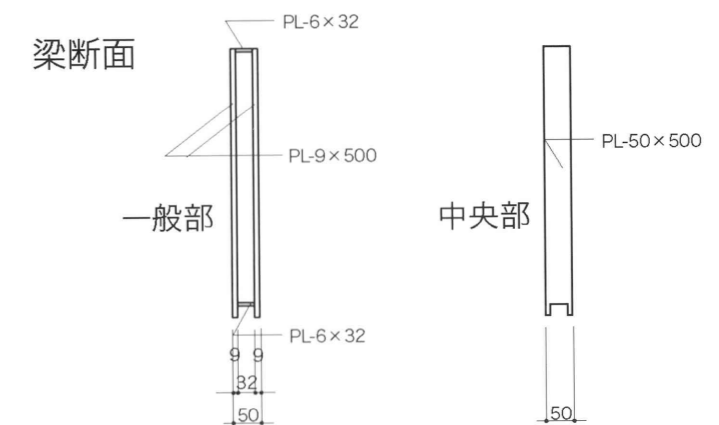
ガラスの包みで包まれた展示空間。200角の柱を強化合わせセラミックプリントガラスでサンドイッチし透過性のある光の壁としている。外壁はガラスとガラスの間の200mmの中空層を有効に利用して、可動式ロールスクリーン。可動式ルーバーを設置して西日を制限する計画とする。



コンテンポラリー常設展示の構造計画



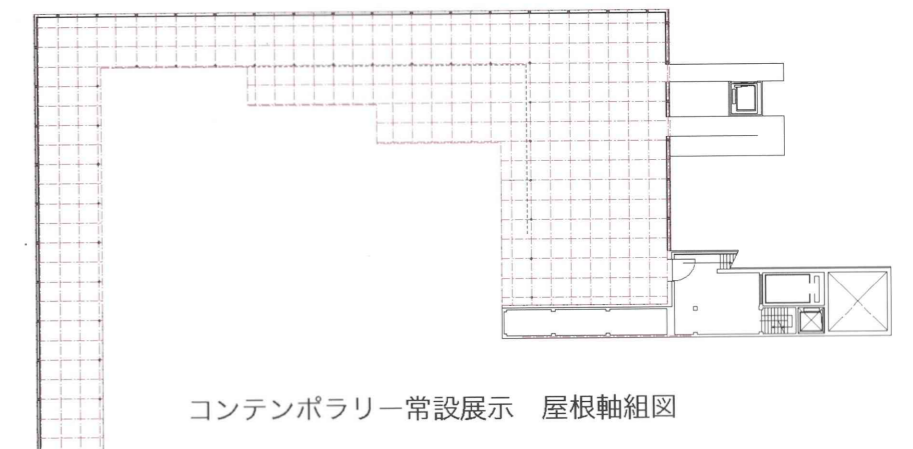
コンテンポラリー常設展示 平面図



梁断面

一般部

中央部

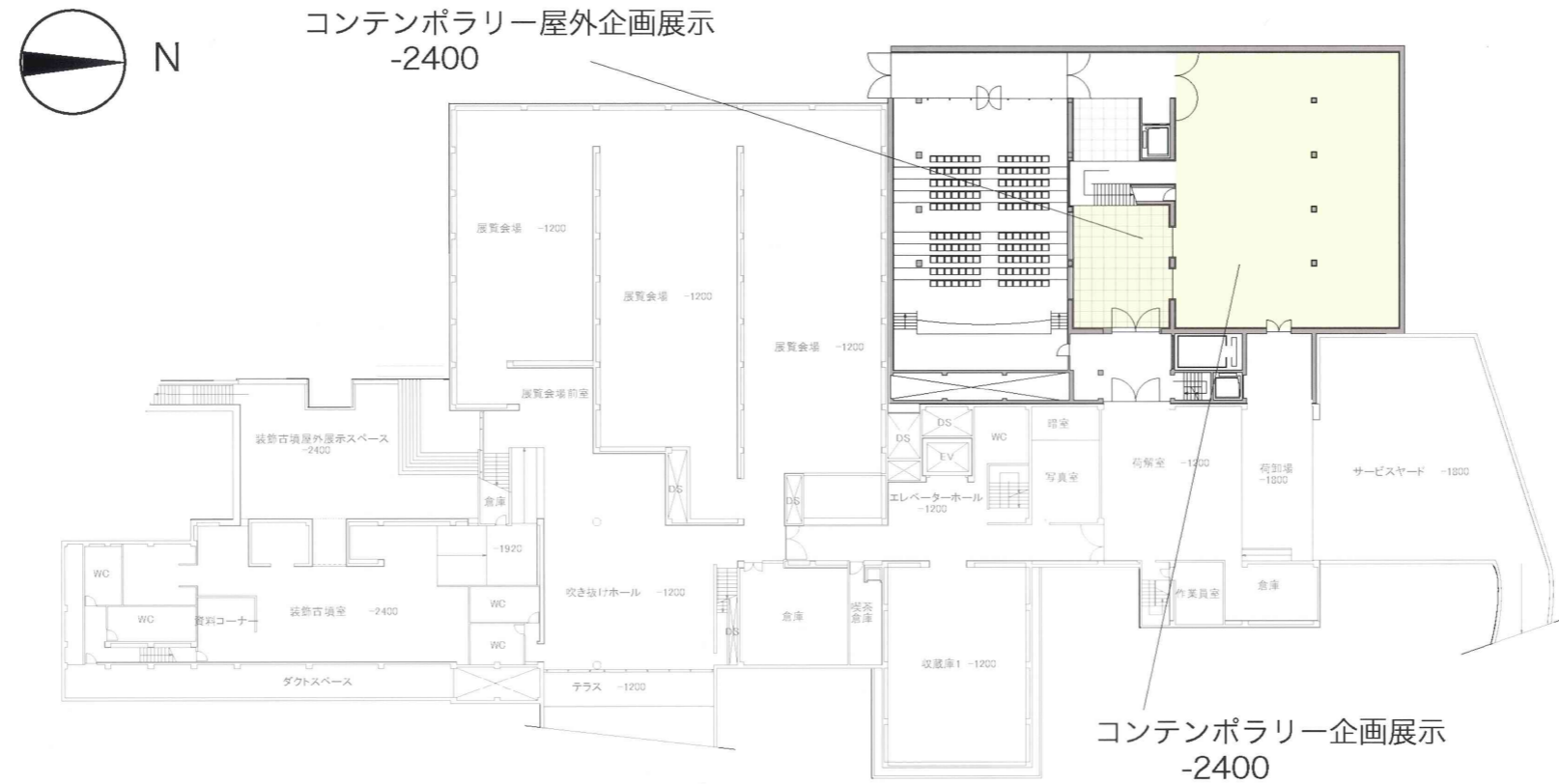
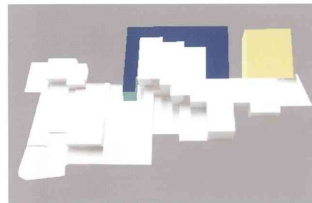


コンテンポラリー常設展示 屋根軸組図

格子梁は1.8×1.8mのグリッドになっており、基本部分はPL-9×500mmの鋼板をボックス状に加工し、応力の大きな部分や梁交差点はボックス状の梁と同形状に加工したPL-50×500mmを組み合わせて構成している。この格子梁を支える柱は200角及びφ200のシームレス鋼管の柱で3.6mのピッチで支える構造となっている。

2、既存から連続する展示空間/一筆書きプラン

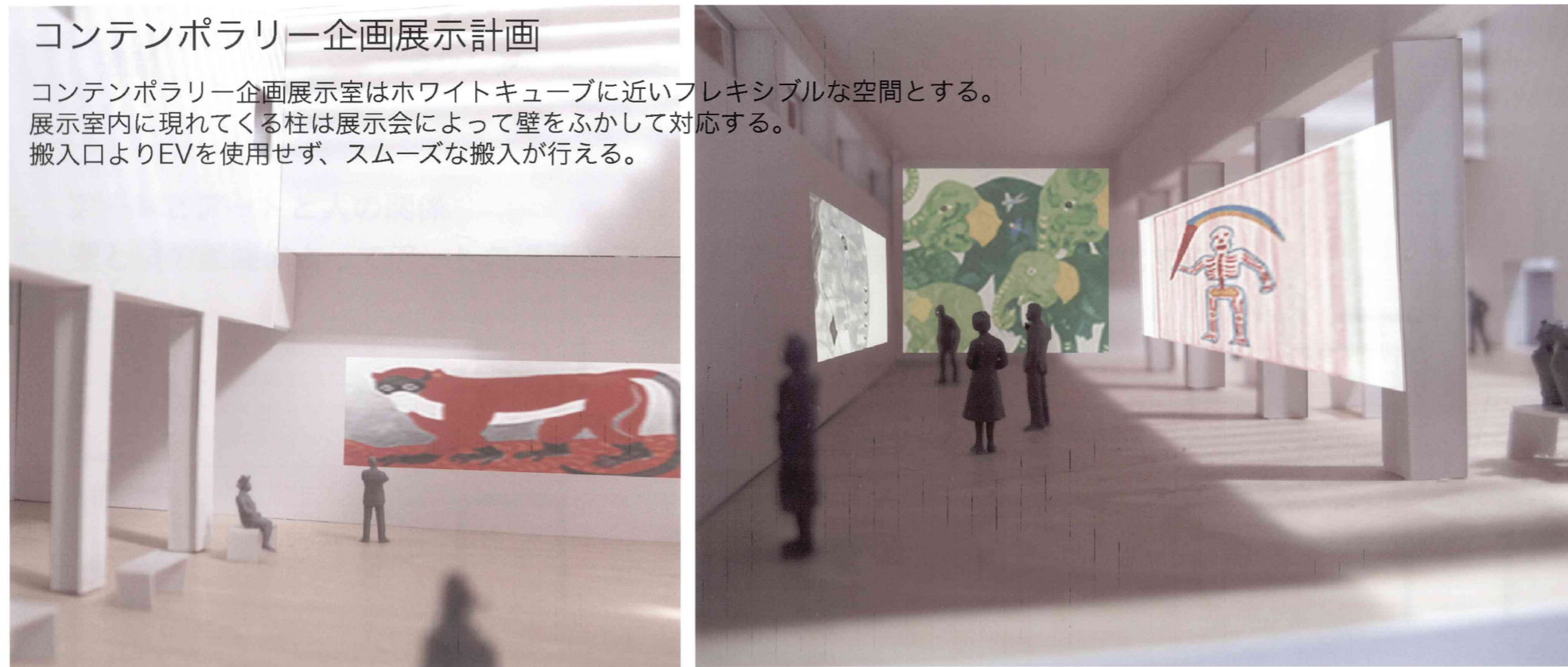
02



コンテンポラリー企画展示 430 m²

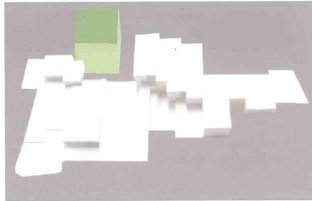
コンテンポラリー企画展示計画

コンテンポラリー企画展示室はホワイトキューブに近いフレキシブルな空間とする。展示室内に現れてくる柱は展示会によって壁をふかして対応する。搬入口よりEVを使用せず、スムーズな搬入が行える。



3、新たな空間をもつ独立したアートキューブ

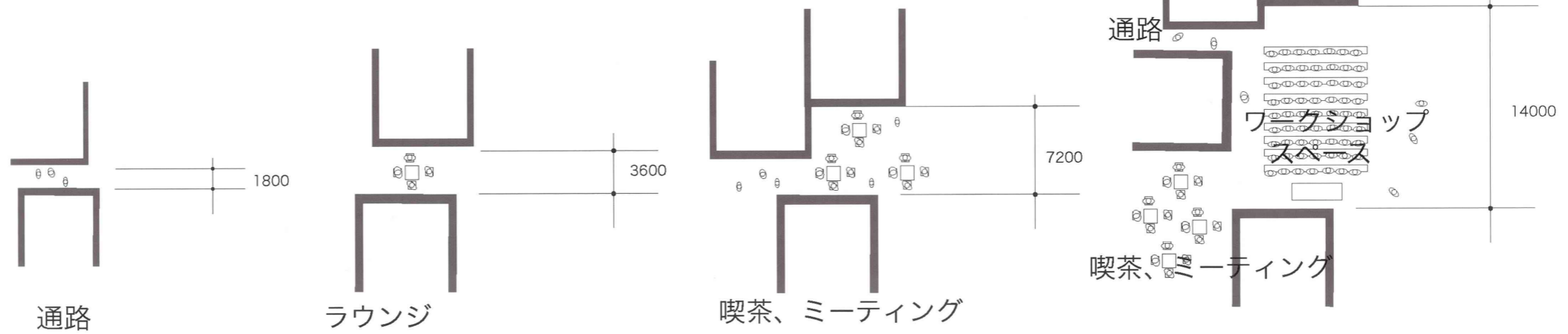
03



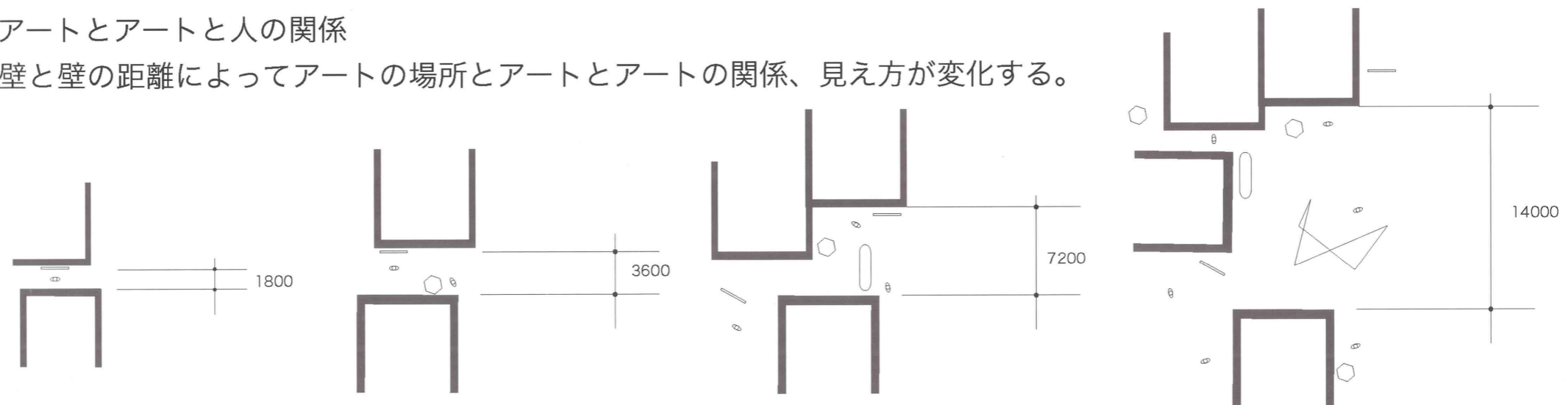
独立した展示室、アトライブラリー、キッズサロンなどの新たな機能は既存の深いアプローチの途中、広場を介して別エントランスで既存展示室の南側にアートキューブとして提案する。公園側からの立面を考えて、又ふらっと立ち寄れる場所を計画地の中からえらび計画した。このアートキューブは既存の搬入口が使用できない／使用しないことや、独自の収蔵庫を持たない。ふらっと立ち寄れることなど既存と大きな違いがあり「共生」のテーマとして既存とは違う質の空間を提案することにする。ここで提案する空間は壁の内側で包み込む前川國男の内部空間とは逆に幾つもの壁の外側が集まってつくる内部空間です。前川國男の神奈川県立図書館・音楽堂の庭や後期の美術館作品の庭空間にみられる箱と箱のずれからできる豊かな空間からヒントをえたものである。

例えば・・・

ひととひとの関係
壁と壁の距離によって空間の質とアクティビティーが変化する。

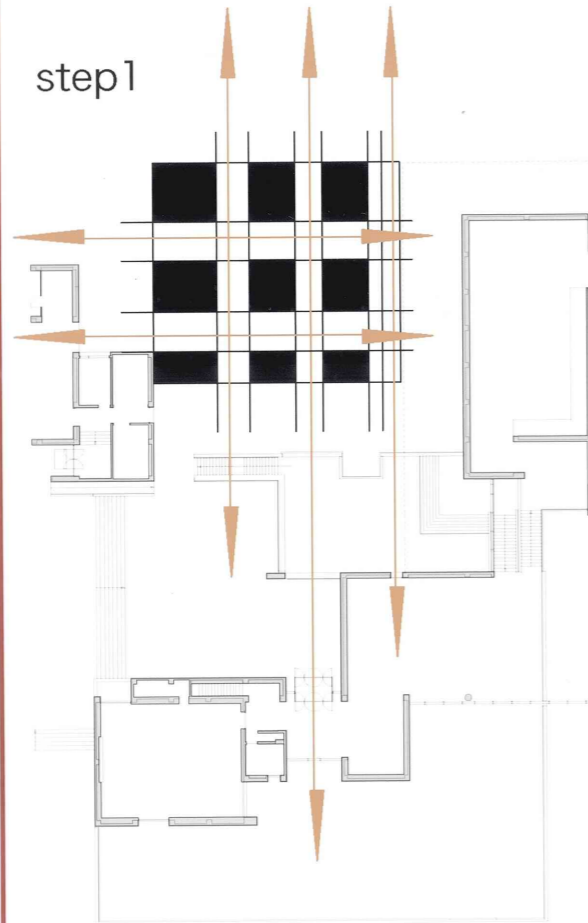
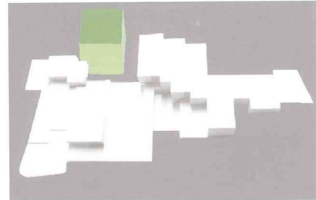


アートとアートと人の関係
壁と壁の距離によってアートの場所とアートとアートの関係、見え方が変化する。



03

のつづき



step1

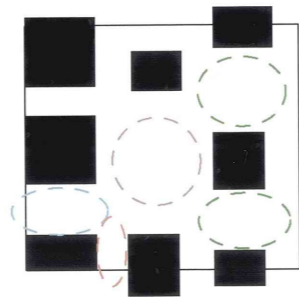
step1 まず周囲の環境を取り込む。
既存熊本県立美術館の「抜け」と連動するように約20m角の敷地に「抜け」を創り、周囲の環境と馴染ませます。

step2 そこに計画されるミュージアムショップやキッズサロン機能を充てていきます。
それにあわせて「抜け」以外の「箱」が変化していきます。
この箱は構造体ともなっています。

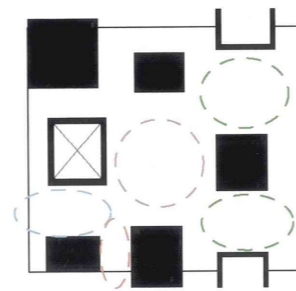
step3 次に箱に機能を充てていき、それにあわせて変化していきます。
充てていくものは階段やエレベーターなどの縦導線や水回りのほか外部や吹き抜けも箱の内側に収めていきます。

step4 最後にもう一度周囲に目を向け、熊本城や樹木にあわせて幾つかの箱をずらします。
このことは約20m角と限られた敷地の中で中心をなるべく多くつくり流動的な空間をつくることにもつながります。

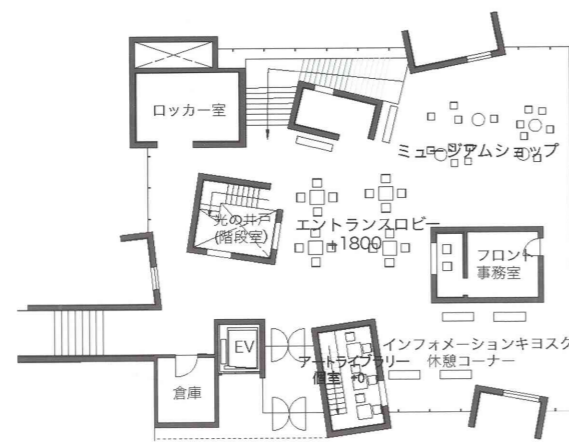
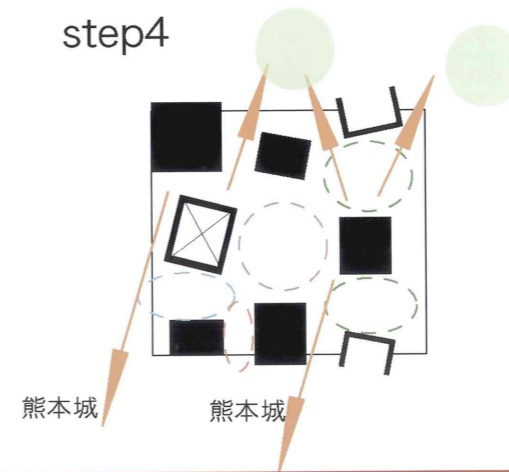
step2



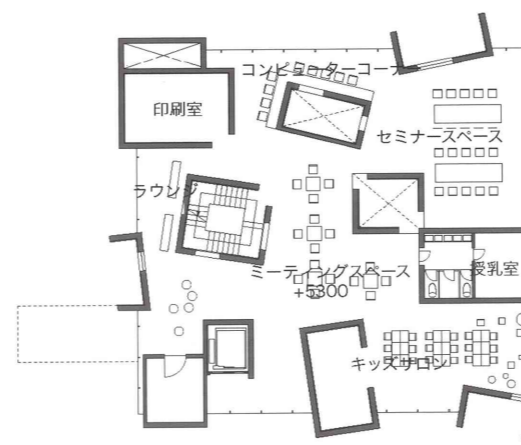
step3



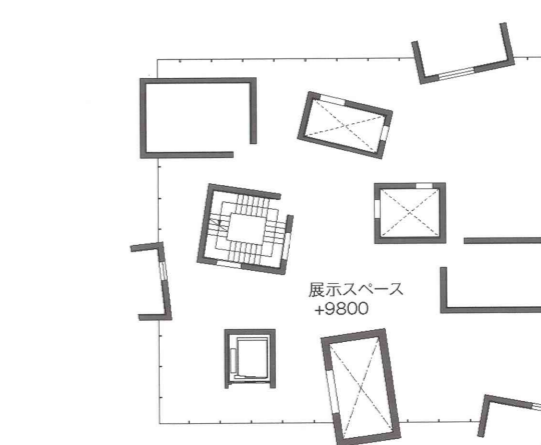
step4



plan +2000



plan +6000

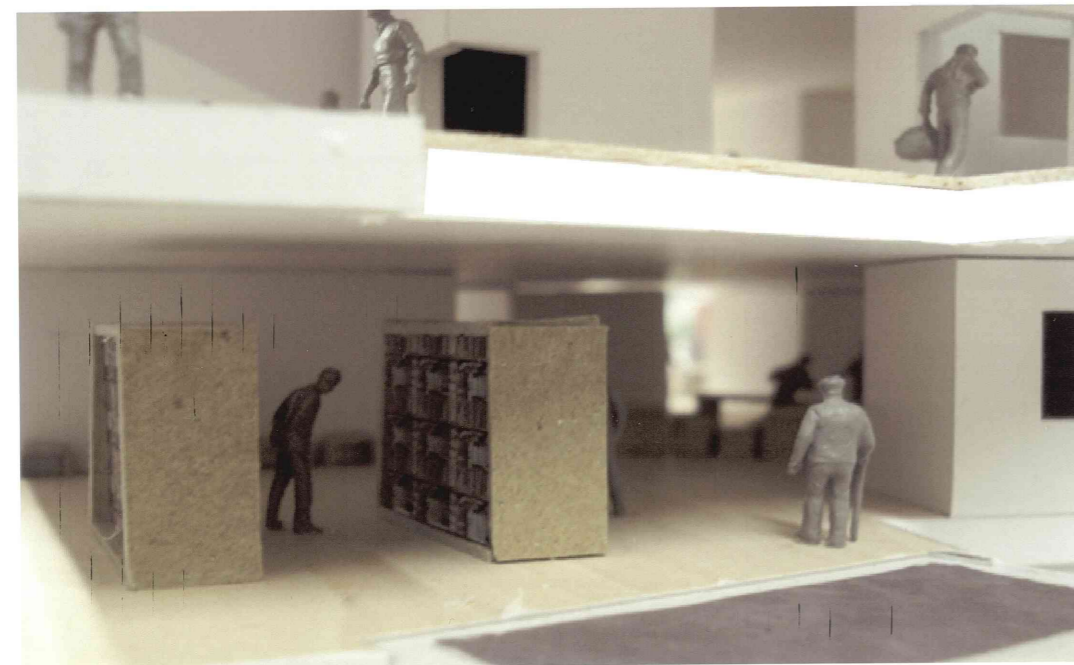


plan +10000

03

のつづき

アートキューブ展示室は壁の外側が集まって空間を形成している。
この新しい提案はアートとの関係を固定してしまうのではなく人の動きや立ち位置によって連続的に関係し合い多様な見えかたをする。この関係性はアートライブラリーやキッズサロンでも同様のことがいえる。

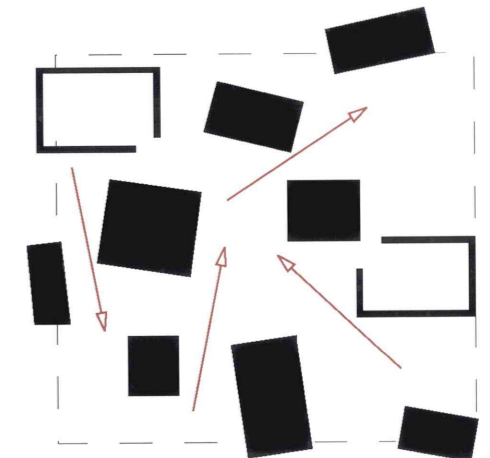


立ち位置によって人と人が離れたり近づいたりしてみえる。離れながらも流動的につながる空間。
来館者は自由に自分の居場所を選べ、制限されない。滞在型の機能が入るアートキューブに適しているといえる。

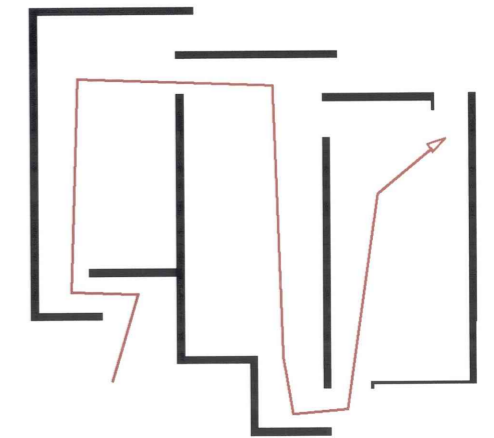


既存の熊本県立美術館との展示室の違い

既存展示室及び、コンテンポラリー常設展示の一筆書きプランとは大きく異なる。
来館者は自由に自分の居場所を選べ、制限されない。滞在型の機能が入るアートキューブに適しているといえる。



アートキューブ展示スペース



熊本県立美術館展示室



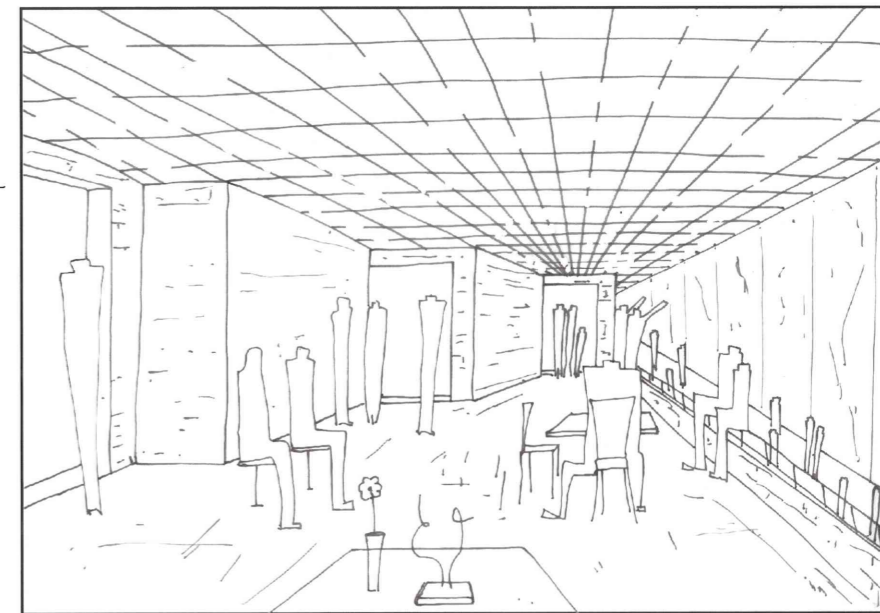
アートプラザ→中庭→古墳室 -2400

本を読みながら古墳を眺める。
中庭は落ち着いた場所。



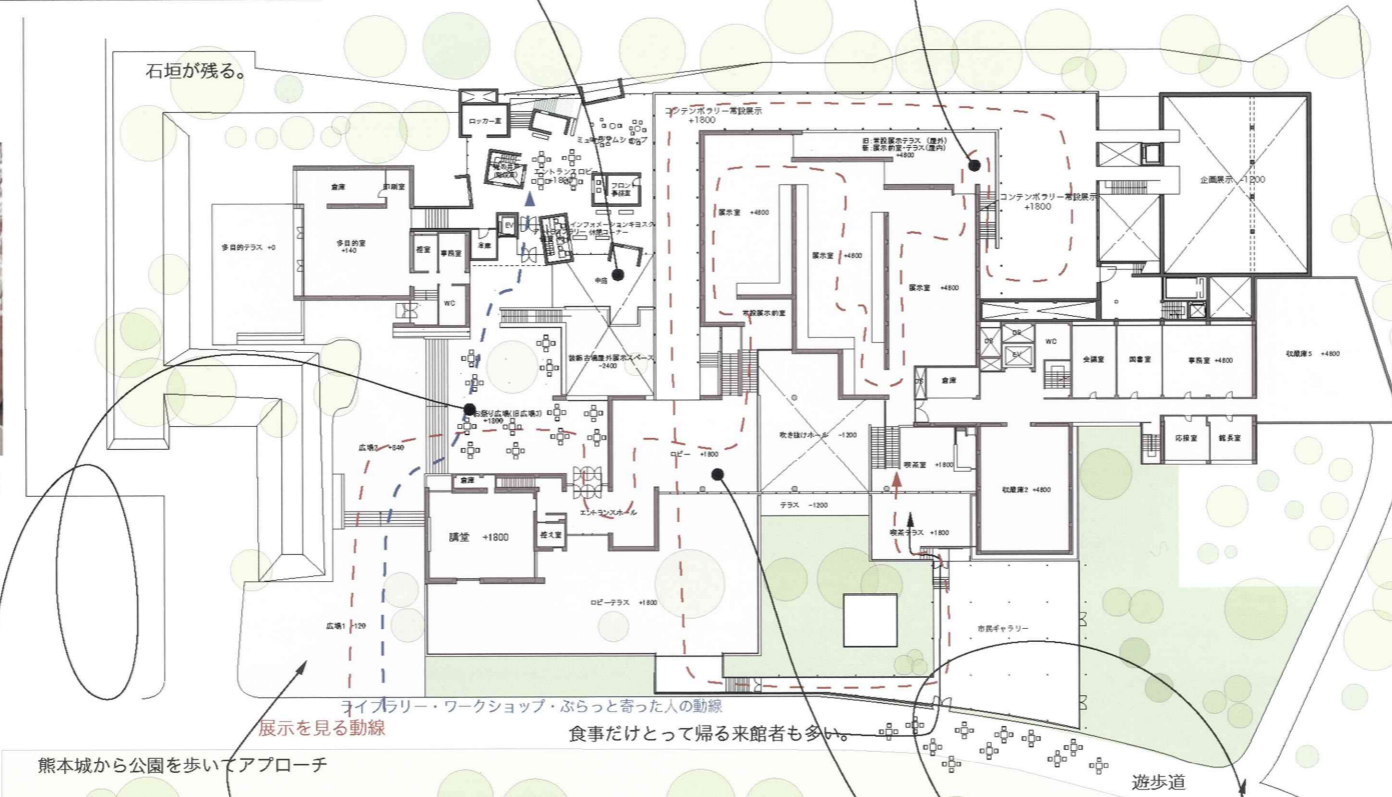
before 古墳室前

after 中庭



屋外が屋内に変化したテラス +4800

屋外のテラスが増築により屋内になる。近代芸術と現代アートの中に位置する
近代と現代のどちらにも属さない固有の空間が広がる。



約7メートル下がった場所に車道が走っている。

展示室の始発点と展示室の終着点のロビー +1800

増築後動線が交差するようになりロビーの使用の仕方がより積極的になる。
展示空間の延長、ミュージアムショップ。
吹き抜けホールと共に舞台、コンサートなどフレキシブルで多様性をもつ
空間となる。



after お祭り広場

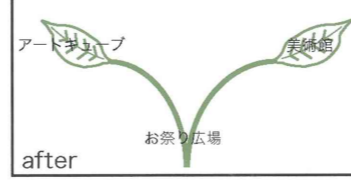
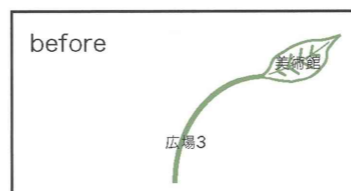
熊本城公園 二の丸広場
様々な人が様々なことを公園で行っている。

2つのエントランスの結節点 お祭り広場 +0~+1800

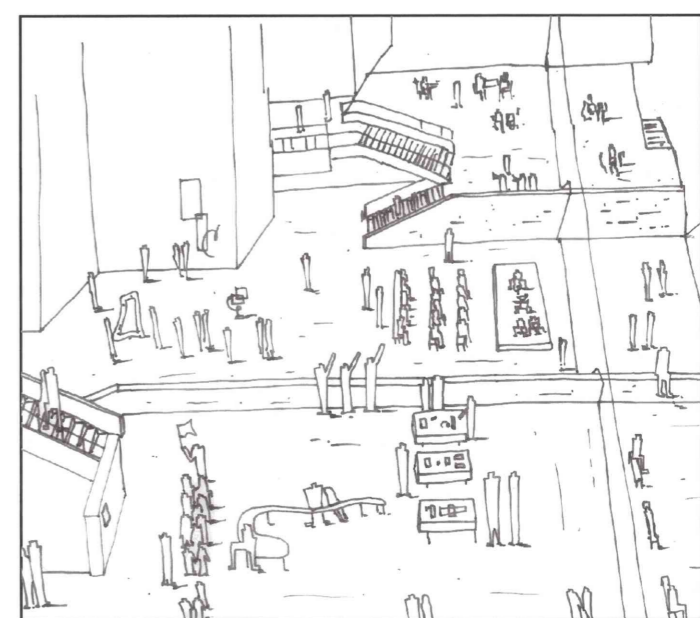
広場3を改めお祭り広場とする。
熊本県立美術館とアートキューブの異なる建物に面した広場。
2つのエントランスのT字路となった広場は
動的で二の丸公園の延長の様な場となる。

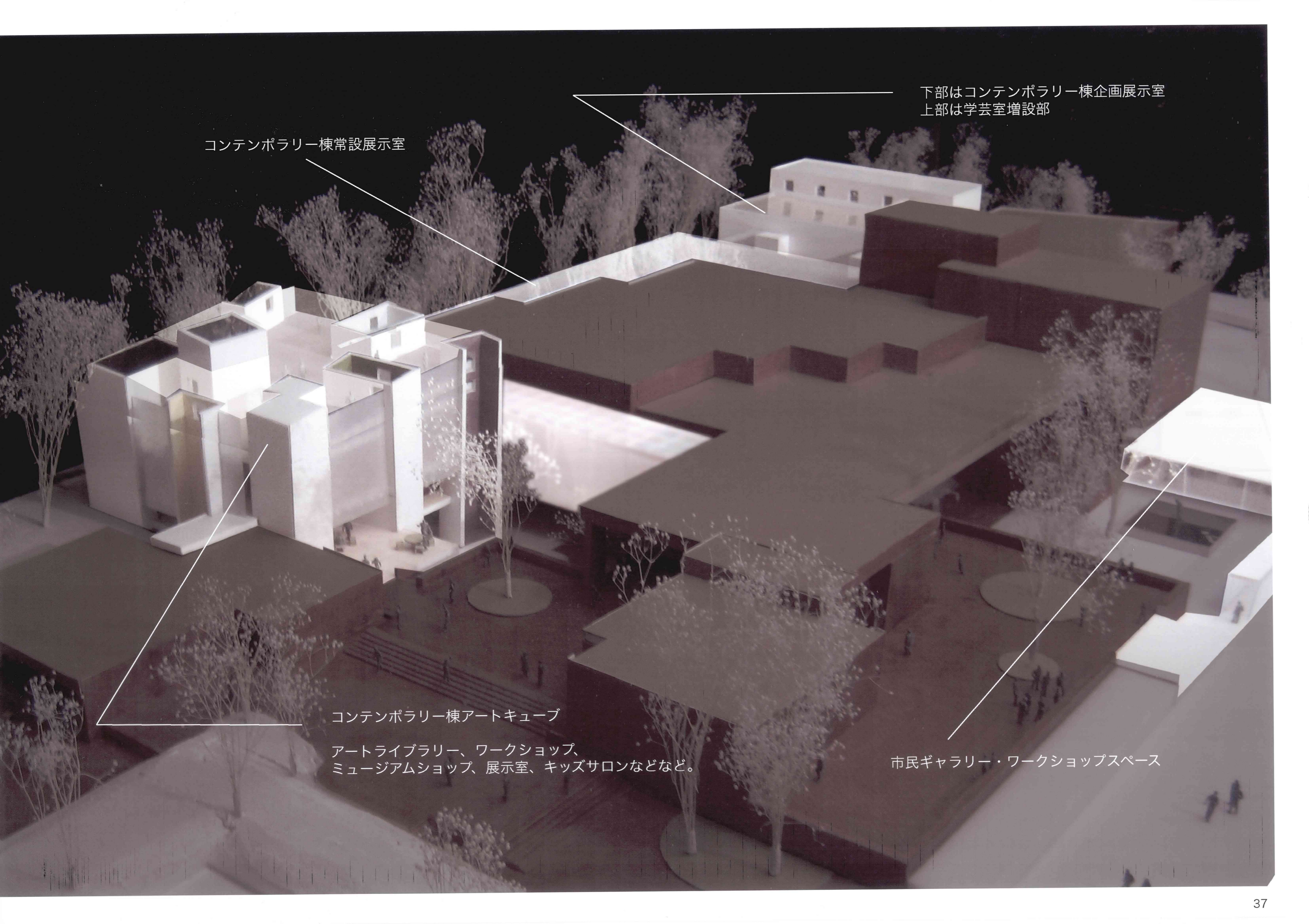


before 広場3



after お祭り広場





コンテンポラリー棟常設展示室

下部はコンテンポラリー棟企画展示室
上部は学芸室増設部

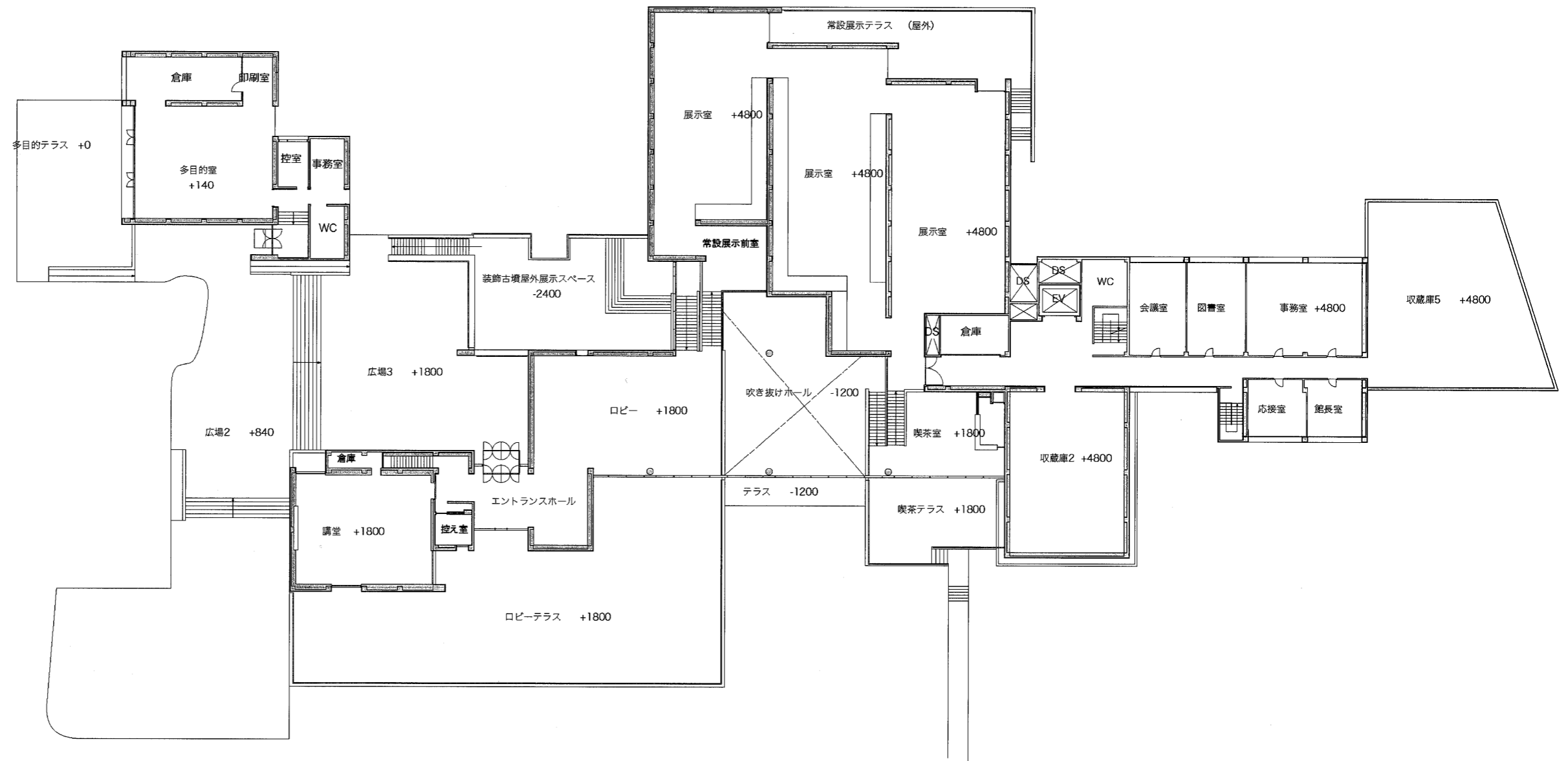
コンテンポラリー棟アートキューブ
アートライブラリー、ワークショップ、
ミュージアムショップ、展示室、キッズサロンなどなど。

市民ギャラリー・ワークショップスペース

before

増築前

既存:熊本県立美術館(1977)
1階・中2階・2階平面図 1/500



西日は樹木（落葉樹ではない）がほとんど遮ってくれるが、それ以外にも可動式ロールスクリーンを設置する。

又、構造的である鉄骨・鉄板はガラスで囲うことにより湿気の多い敷地での劣化を抑える。

石垣が残る。
厚400の壁で出来た箱はそのまま構造体となる。
外部も部屋にしてしまおうとする壁

アートキューブとつながる既存多目的室。
2008年4月には細川コレクション展示室に生まれ変わる。

after 増築後

既存:熊本県立美術館(1977)
増築:コンテンポラリー棟(2008)
1階・中2階平面図 1/500

2つのエントランスに挟まれたお祭り広場
相反する建築の結節点をお祭り広場と命名。
別の建築が広場のを介してT字に並列することで
街の中にあるような空間になる。

連続した展示空間がたどり着くロビー
導線が交差する交差点となり、
前面のテラス、ホールと共に展示の延長、ギャラリー、演奏会、
など公園にもアクティビティ・アートを発信する。

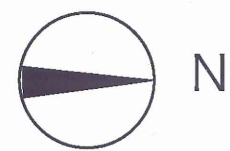
展示を見る動線
ライブラリー・ワークショップ・ぶらっと寄った人の動線

食事だけ食べて帰る来客者も多い。

熊本城から公園を歩いてアプローチ

様々な人が様々なことを公園で行っている。

出入口
関係車両以外車両通行禁止



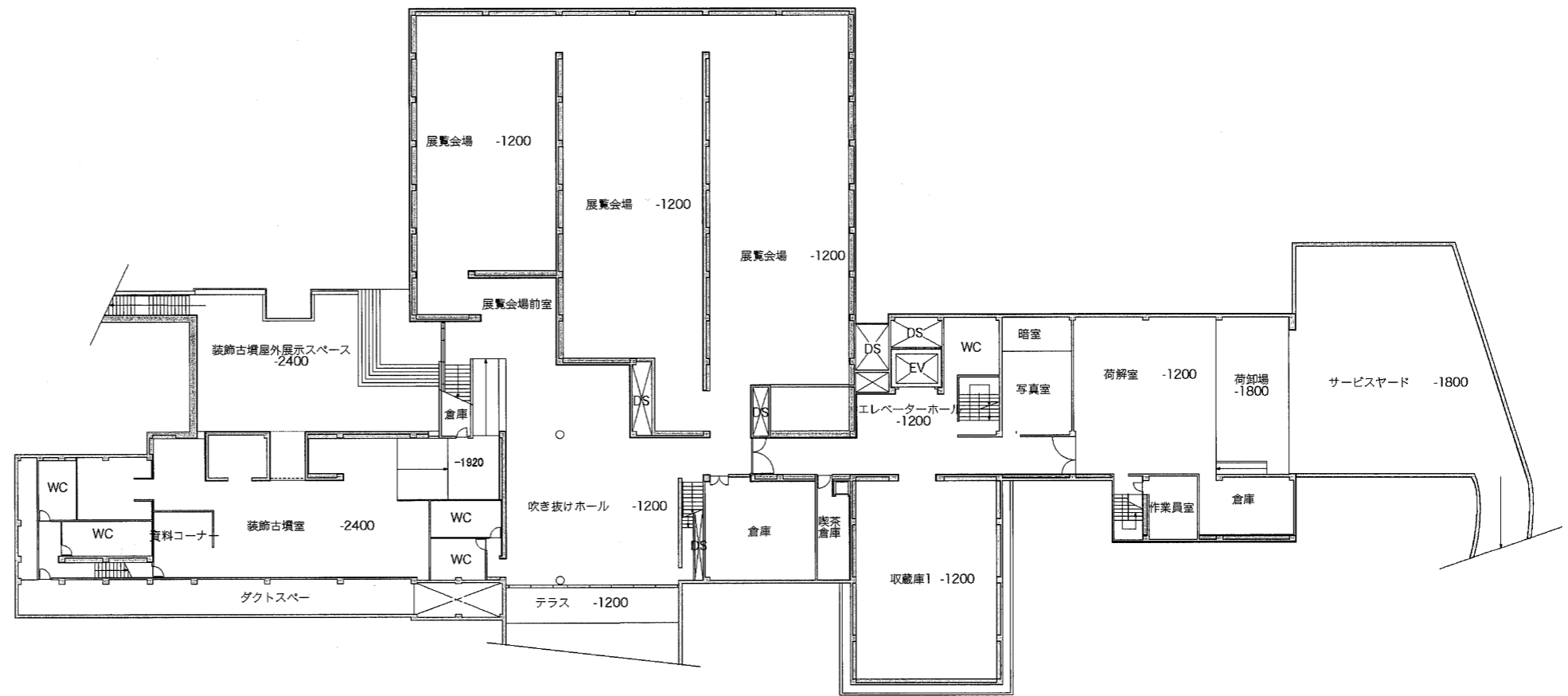
1/500

公園と喫茶室に挟まれた市民ギャラリー
食事だけぶらっと訪れた人が、公園をランニング中に中をみる
ことが出来るような市民ギャラリー。喫茶室と一緒にアート喫茶、
前面ガラスを開けて公園と同化したワークショップスペースにも
することができる。

before

増築前

既存:熊本県立美術館(1977)
地下1階平面図 1/500

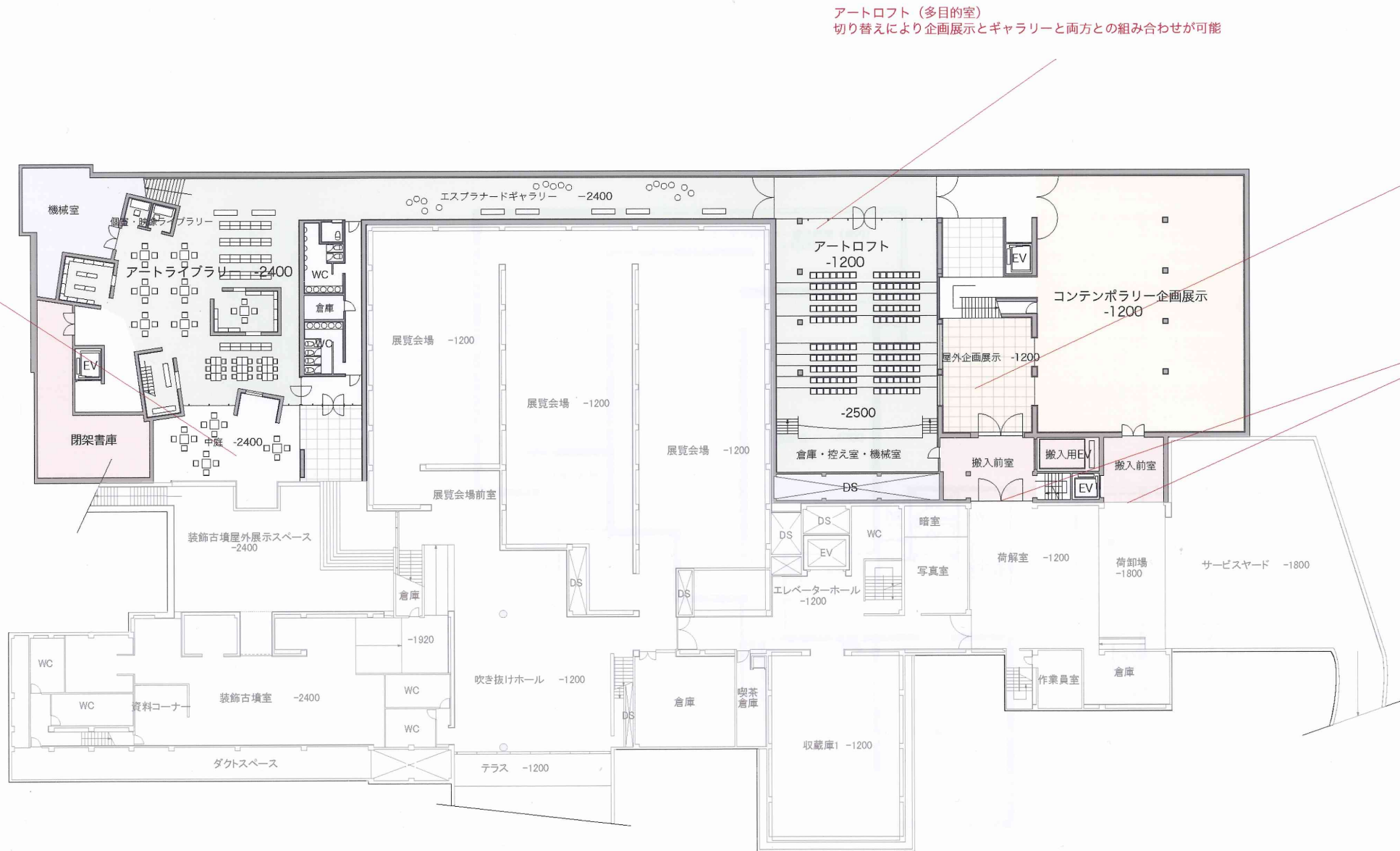


after

増築後

既存:熊本県立美術館(1977)
増築:コンテンポラリー棟(2008)
地下1階平面図 1/500

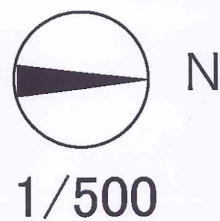
古墳を見ながら本を読む。
落ち着いた空間。



アートロフト (多目的室)
切り替えにより企画展示とギャラリーと両方との組み合わせが可能

屋外展示。
中庭の空間となり光が落ちる。

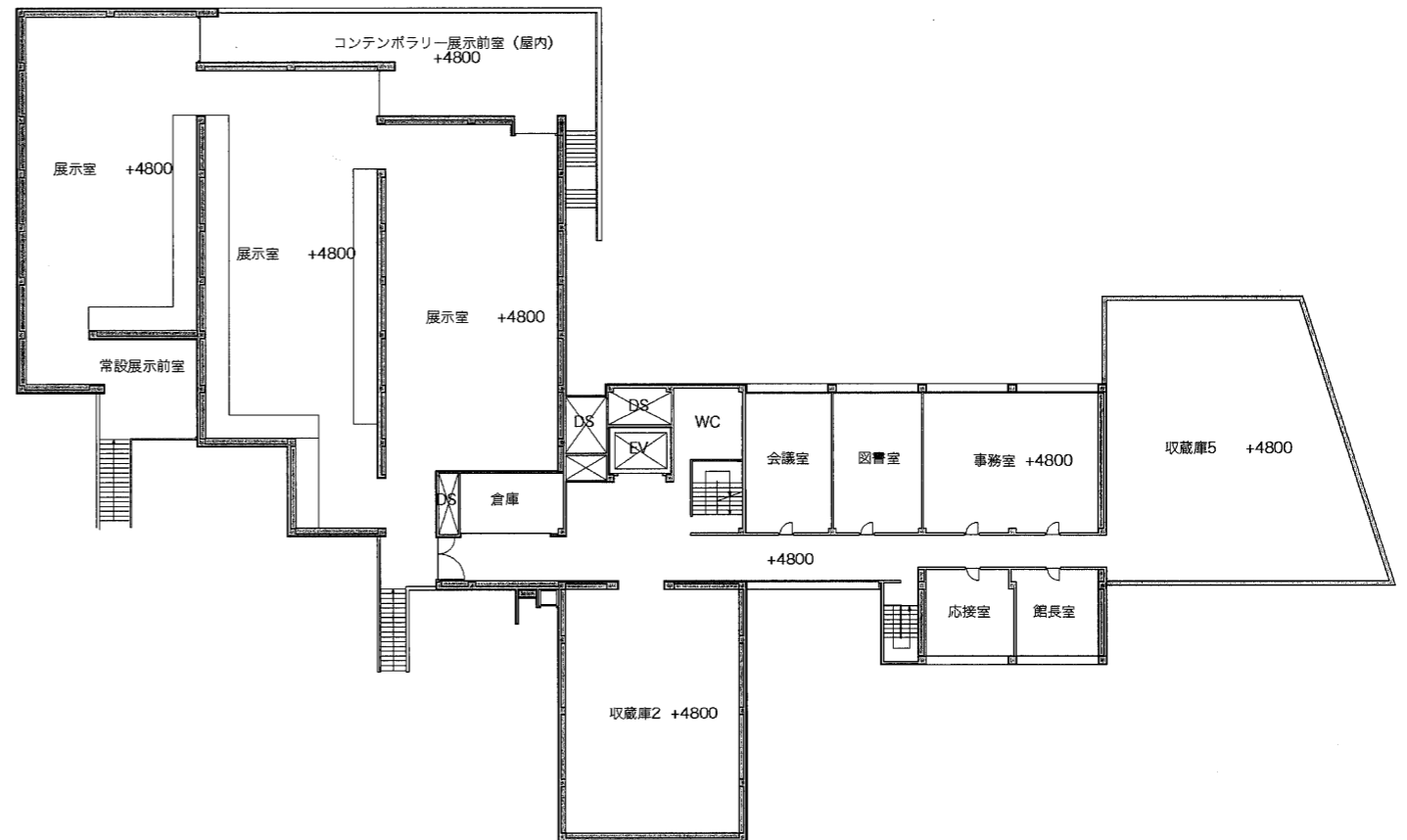
既存搬入口から直接搬入が可能



before

増築前

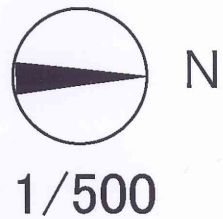
既存:熊本県立美術館(1977)
+6000平面図 1/500



after

増築後

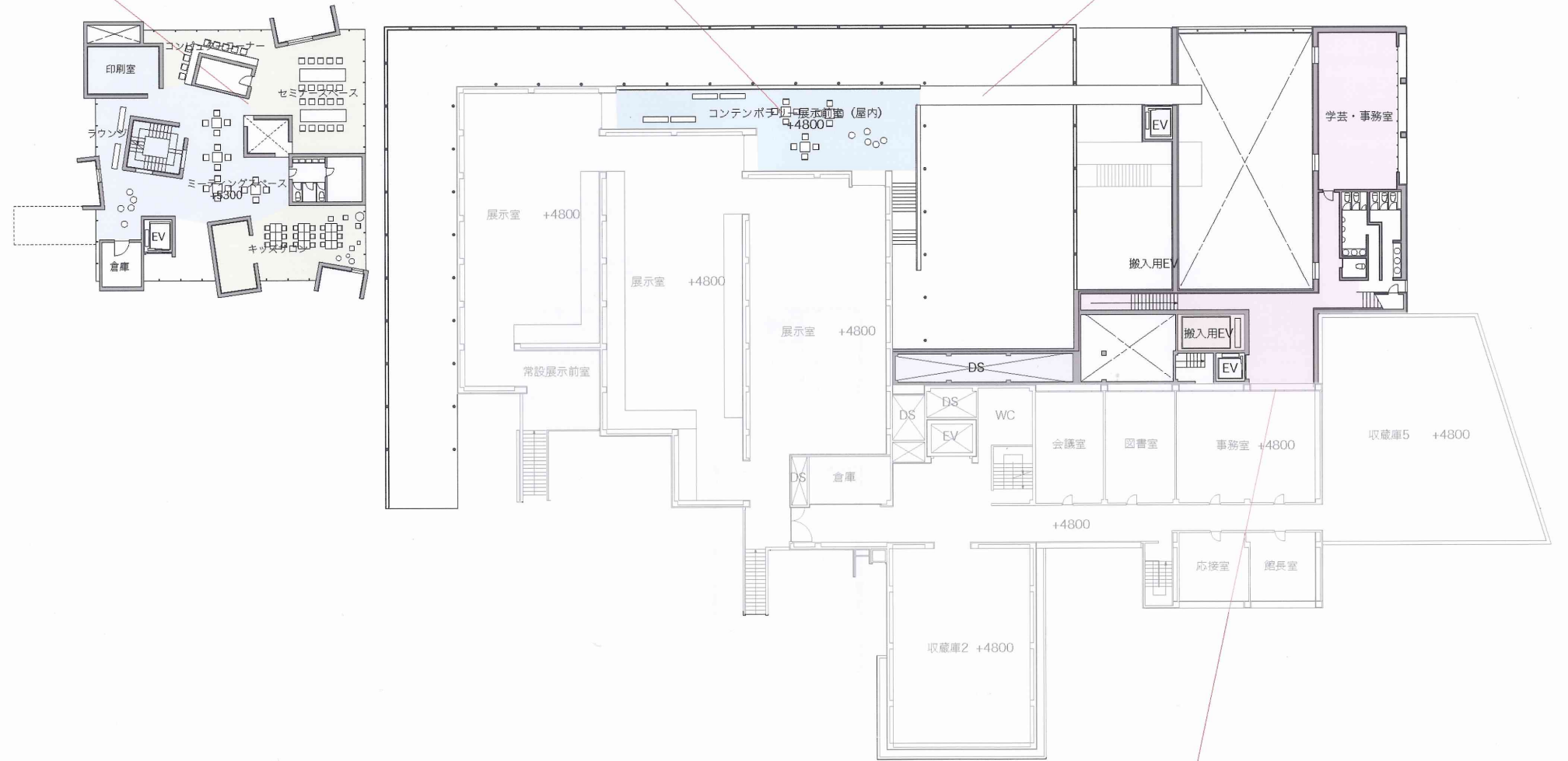
既存:熊本県立美術館(1977)
増築:コンテンポラリー棟(2008)
+6000階平面図 1/500



空間と空間の曖昧な境界。
流動的につながる。

外部から内部へと変化したテラス。
ガラスで包んだテラス。
近代美術と現代アートの間の一息つく空間。

ブリッジを設け、足の不自由な人やお年寄りにも対応する。

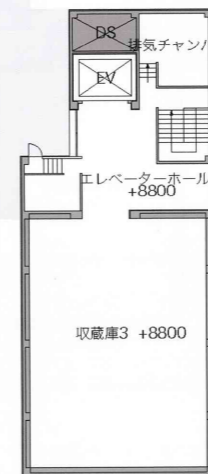


既存学芸室と増設部学芸室は+4800でつながる。

before

増築前

既存:熊本県立美術館(1977)
+10000平面図 1/500



ガラス面はダブルスキンを想定する。

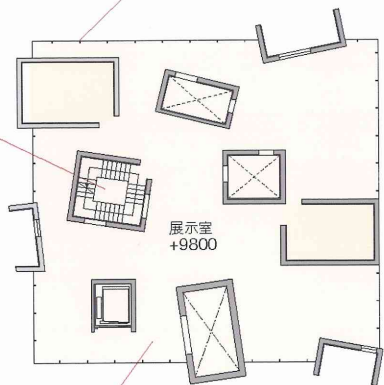
コンテンポラリー企画展示室の上部トップライト。
可動式ルーバーにより光の量を制限する。

光の井戸
換気塔の役割も果たす。

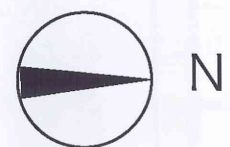
after

増築後

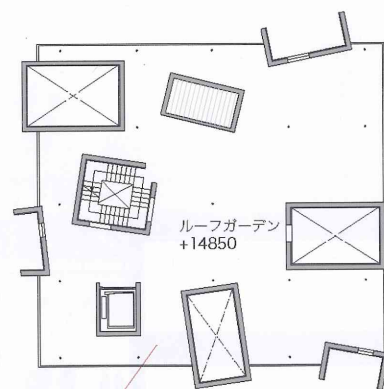
既存:熊本県立美術館(1977)
増築:コンテンポラリー棟(2008)
+10000平面図 1/500



熊本城を眺める。



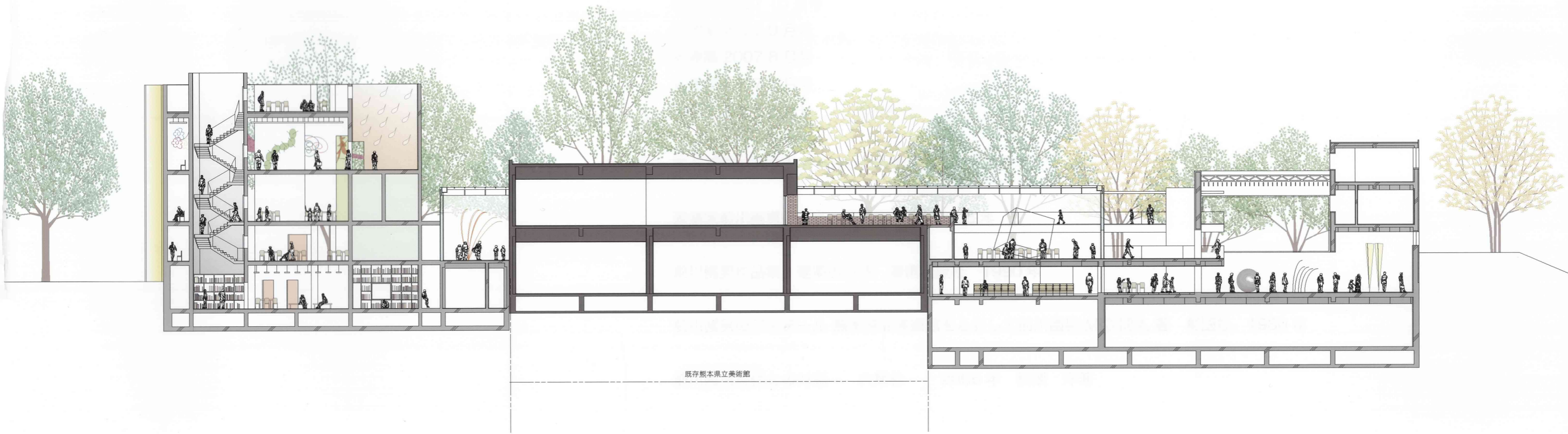
1/500



+14000平面図 1/500

熊本城を眺める。

KUMAMOTO PREFECTURAL MUSEUM / 熊本県立美術館
SECTION / 断面図



断面図 1/500

参考文献

十和田市立現代美術館 HP

<http://www.artstowada.com/jp/artworks.html>

10+1 (INAX 出版) 2004 No.35

独立行政法人国立美術館の中期目標-文部科学省 2006 年 12 月 14 日

大江宏 新建築 1966 7 月号 新建築社

モダニズム建築の軌跡 監修内井昭蔵 INAX 出版 2000 年

新建築 2008 2 月号

新建築 2008 1 月号

新建築 2007 12 月号

新建築 2007 11 月号

新建築 2007 10 月号

新建築 2007 9 月号

新建築 2007 8 月号

新建築 2007 7 月号

新建築 2007 6 月号 新建築社

第 3 版コンパクト建築設計資料集成 日本建築学会

建築家前川國男の仕事 美術出版社 2006 年

前川國男作品集 建築の方法 美術出版社 1990 年

前川國男のディテール 熊本県立美術館をとおして前川國男 MID 同人 著 彰国社 1980 年

前川國男現代との対話 六耀社 2006 年 松隈 洋著

謝辞

はじめに、本論文・設計を作成するにあたり、多くの方より御指導、御協力を賜りましたので、ここに感謝の意を述べさせていただきます。特に主査であり、長い間お世話になった大江新教授及びスタジオで指導して頂いた早川邦彦氏には大変お世話になりました。

早いもので私が大江研究室に足を踏み入れてもう3年の月日が経ちました。地下の薄暗い決してお世辞でもきれいとは言えない研究室も今となっては私にとって大切な場所です。大江研究室では多くの人との出会いがありました。入るまであまり話しをしたことのなかった同級生も今では大切な仲間です。又卒業していった多くの先輩方には大変お世話になり、研究室で談笑したことが今でも昨日のこのように思い出します。さらには眼鏡率の高いM1、個性豊かな4年生、手伝いに優秀な3年生達や研究室外の1、2年生など多くの後輩にも恵まれ充実した大学院生活を送ることができました。この場をお借りして深く感謝の意を申し上げます。

また、この論文・設計を作成するにあたり、多くの方々の尽力を頂戴しました。仕事が休みの日に大学まで駆けつけてくれたアスリート荒地。ありがとう。はるばる遠路手伝いにきてくれた1年生の渡辺さん、野菜ジュースがすぎな駒井さん。ありがとう。短時間で模型に四重奏を入れてくれた3年生の中山さん、樹木を制作してくれた荒木君。ありがとう。卒業設計が終わって休む間もなく手伝ってくれた4年生、朝まで立川、ゼミ長増田、スイマー関根、スティック鈴木。ありがとう。そして何人かヨーロッパに旅立ったあとギリギリまで手伝ってくれたイケメン藤井。ありがとう。みんなありがとう。

繰り返しになりますが、学生生活において御指導、御協力して下さった多くの方々に、改めて深く感謝の意を申し上げます。これからは社会人として、また法政大学・大江研のOBとして、恥じる事のないように日々精進していきます。

最後に、これまで私を支えてくれた家族・友人に深く、深く感謝の意を申し上げます。本当に有難う。

2008年2月